

◎『新全訳古語辞典』刊行記念インタビュー

いま古文が熱い……!

サンキュータツオさん

「学校では教えてくれない! 国語辞典の遊び方」の著者で、辞書のおもしろさや活用方法を発信しつづけるサンキュータツオさん。いま、注目の辞典のひとつという『新全訳古語辞典』(小社刊)についてお話を伺いました。

現代の感覚で伝える、

4Kの古語辞典

——『新全訳古語辞典』をご覧になつてすぐに、ツイッターで「これは古語辞典の革命だ」と言っていたきました。

この辞典を手にとったときに感動しました。手に取った瞬間、本気だな、かなりや



る気だなと思つたんですね。テレビで言えば、今までハイビジョンだったのが、いきなり4Kになったみたいな感じです。

古語辞典が国語辞典と何が違うかというところ、扱う言葉が増えないということですね。古文で使われている言葉を対象にするから、新しい言葉が増えないので、載せている言葉は各社の古語辞典によってそれほど大きくは変わらない。ということは、それぞれの古語辞典の違い、特色というのは、収録している言葉や事項をどう記述・表現するか、というところに表れるんです。つまり、ハイビジョンも4Kも、映しているものは同じなんです。表現の仕方が違うと、受け手の見え方も違ってくる。この『新全訳古語辞典』は、今まで見てきた古語辞典とまるで違っていてびっくりしました。

——具体的にどこがどう違うのでしょうか?

まず、付録が辞典の真ん中にきている。普通は最後にもってくるし、読まないです。付録はそれを真ん中にもってくることで、「何かあるぞ」と思わせまますよね。しかも、辞典の断面に赤い線が入っていて、一発で引けるようになってる。

それで開いてみると「百人一首事典」つ

ていう付録に「式子 memo」定家 memo」というコラムが入っていて、歌人キャラクターがいろいろと教えてくれる。例えば、「恋愛禁止! 斎宮・斎院とは?」の欄(376ページ)には、斎宮や斎院というのは任期中の恋愛はタブーであるとか、斎院だった式子内親王も、百人一首の歌では「偲ぶ恋」を歌っていて、相手は十歳ほど年下の藤原定家だったらしい、なんて、ちょっとしたスキヤンダルまで載っていたり(笑)。宮中も狭くて、芸能界みたいなものですから、今だと週刊誌とかで叩かれますけど、昔の人も今のと同じように道ならぬ恋もあったんだなあ、とか思いますよね。

あるいは、「前はあの人と付き合っていたけど、今はこいつと付き合っているらしいぞ」みたいなのが歌で読める、みたいなね。そういうことを現代の感覚に変換して伝えてくれるコラムだと感じました。

それから、「弥次・喜多と歩く 古語ウォーキング事典」という付録。「枕詞・序詞は和歌のBGM」っていうコラムがあって(793ページ)、「あしひきの山鳥の尾のしだ



『新全訳古語辞典』刊行記念
インタビュー

り尾の長々し夜をひとりかも寝む」の歌を例に説明しているんですが、ちよつと読んでみますと、……枕詞は「あしひきの山」というきまつた言い方で、大多数の人々にゆつたりとしたイメージ・情緒を感じさせる。序詞は「長々し」という語を印象的・鮮明に引き立てるだけでなく、歌全体にバックグラウンドミュージックのようにひとり寝の男の慕情を漂わせ、その上「の」のリフレインによって歌の生命ともいふべき快いリズムをつくり出す……。ああそうか、音楽だったんだ、と。なんかもうヒップホップの解説みたいですよ。ぼくらは古文を習うときに、枕詞や序詞っていうのはそういうものだと、「あしひきの」だったら「山」で覚えなさいと言われたと思うんです。でも和歌っていうのは、ヒップホップなんかと同じで、ルールがあつて音の数をそろえないといけない。一首の中で歌の意味に合わせながら音の数を整えなくてはならないというときに、枕詞や序詞というのが入っている。「やま」だと二音だけど、「あしひきの」を入れると歌っぽくなる、それはBGMのなんだ、と。こういう説明



サンキュータツオ

1976年東京生まれ。早稲田大学大学院文学研究科日本語日本文化専攻博士後期課程修了。お笑いコンビ「米粒写経」として活躍する一方、一橋大学や成城大学で文章表現等の非常勤講師も務める。中学・高等学校国語科第一種教員免許も取得。所有する辞書は200冊以上。近著に『もっとヘンな論文』（KADOKAWA、2017年）がある。

って、これまでの古語辞典にはあまりないんじゃないですか。

古典という

ZIPファイルを解凍——古典の世界をいかに伝えるかというところでですね。

ええ。ぼくは今、落語会を毎月やっているんですけど、何が困るかという、例えば落語に出てくる魚屋さんって現代におけ

浜」という斬で、お酒を飲んで魚屋をやらなくなつた人が、客の信用を失つてまるでお金を得ることができなくなつてしまったというの、当時の魚屋がどういうものなのか、知っているのと知らないのでは、全然、理解が違ってくるんですよ。

古典っていうのはZIPファイルだとぼ



くは思っているんです。その当時の人の生き方や生活、人々の想いというのを、すごく圧縮した情報にしているのが古典。日本で一番小さいファイルは和歌だと思っんですけど、現代はそのZIPファイルを解凍できなくなつてしまっている、バージョンアップしすぎて。上代・中古・中世・近世……と、時代が違うことに拡張子が違つたりもするので、現代のパソコンで解凍しようとしてもなかなか開けない。そのZIPファイルを『新全訳古語辞典』は、現代の若い人たちが少しでもわかるように、と、解凍してくれる。コラムの解説もそうですが、「うひうひし」は古語ではマイナスのニュアンスを持つ言葉だよ」とか、「しとみ」は住居に関わる言葉ですよ」「天の川」は秋の季語なんだよ」なんていうことが書いてある。いや、書いてあるっていうか、アイコンで視覚的に表示してあるというの、とてもビビッドに、一発で解凍してくれていると思います。

辞典はまだまだ

チャレンジできる

——この辞典の体裁やデザインにも注目していただきました。

まず、表紙が本文のサイズと同じところですよ。ということは、先頭にある凡例のページが開きやすい！ 辞書が好きで、表紙を本文より大きなサイズにするものが多いのですが、それだと凡例や最後のほうのページがぱつと開けない。だから辞書好きは、わざわざカッターで表紙を切つてから使ってください（笑）。『新全訳古語』は1ページ目から開きやすくて、「最初から最後まで読んでほしい」というメッセージを手にとった瞬間に感じました。

それから、紙面に余白があるという点ですね。「す（為）」の謙譲語が時代によってどう変わったのかを説明する敬語コラム（520ページ）も、文字のない白のスペースをかなり作っていますね。これ、今までの辞典だと文字で埋めて、無駄なスペースがないように収めちゃう気がするんですよ。

もこの辞典は、たぶん、こういう白の部分を作ることによって、よりビビッドに伝えるっていうことを意識している。全部文章で記述してしまうと、まず読む気になりませんから。紙幅が限られているなかで、多少の余白を作っても、一発で見えてわかるようにしている。

用例の出典表記のところなんかも、赤色に網掛けをして薄いピンクにしたり。どこが出典でどこが原文なのか、一目でわかる。おまけに、教科書に掲載されている例文には、本のアイコンが付いている。教える側の先生にとっても、使う側の生徒にとっても優しい紙面になっているんじゃないでしょうか。

古語辞典ってまだやれることがたくさんあるんだなっていうことを、この辞典を見ましたし、今まで試みなかったことにチャレンジしているところを、実際に先生方、あるいは生徒さんたちに知ってほしいなと、思いました。……って、ぼく大修館の社員でもないのに、なんでこんなに推してるんだっていうことだと思っんですけど(笑)、本当にこれ革命なんです、

古語辞典の。

——ありがとうございます。

千年分の

コミュニケーションを楽しむ

——辞書への熱い思いとともに、古典への熱をとても感じました。

千百年ほど前に生きていた、平安時代の歌人、伊勢の一首に「ありそ海の浜にはあらぬ庭にても数知らねば忘れてぞ積む」というものがあります。簡略に言うところ、「こんなにたくさんきれいな砂をくれてありがとう！」という感謝を歌にしているものなのですが、いまの私たちからすると、砂くられて感謝ってなんだよって思いますよね。そんなの燃えないゴミを送られただけじゃないかと(笑)。でも、テレビもネットもラジオもない時代、四季に合わせて庭の様子をいかに美しく保つかは当時の人たちの大きい関心事でした。白く美しい砂が庭にあればそれだけ権勢を誇ったそうです。砂や石の運搬も、車がない時代には容易ではありません。なのに良質な砂をくれるとい

——そう思うと古文の世界が身近に思えてきます。

言葉は使っていた人たちの生活や感情も伝えるツールです。日本人としてそれを知るチャンスが広がるのが古文なんだな、と。現代語ばかりやってきましたが、残りの時間の楽しみが増えました。これからこの辞書は手放しません。

(二〇一七年八月三日大修館書店本社にて)



うことはどれだけうれしかったことか。現代でいえば、大きい4Kの液晶テレビくれたとか、日本では手に入らない外国車を買ったとか、そういうものに匹敵することじゃないでしょうか。そこをただ「ありがとう」というのではなく、機智を込めて歌にするという感謝の仕方、とてもおしゃれだと思いませんか？

——はい、かつこいいです。

これは、すぐに連絡が取れるLINEやメールで「ありがと☆」というのとはわけ

サンキュータツオさんのオススメ！

◆古典に関する書籍

『新全訳古語辞典』

林巨樹・安藤千鶴子 編
一三三頁
定価 本体一八〇〇円＋税
大修館書店

高校国語科の先生方が
お寄せくださった感想を、
小社HPに掲載。



『日本古典評釈 全注釈叢書 伊勢集全注釈』

秋山虔・小町谷照彦・
倉田実 著 八八〇頁
定価 本体二〇〇〇円＋税
KADOKAWA

平安の女流歌人伊勢の歌、全五四六首
について詳細に考察した力作。

『枕草子のたくらみ——春はあけぼの』
に秘められた思い！

山本淳子 著
三一八頁
定価 本体一五〇〇円＋税
朝日新聞出版(朝日選書)

『枕草子』執筆に込められた清少納言の
戦略を説き明かす話題作。

◆『明鏡国語辞典』にも一言！

北原保雄 編
一九五四頁、別冊九六頁
定価 本体二五〇〇円＋税
大修館書店

「これほど『教育』ということを意識してくれて国語辞典はないと思います。日本語教育の現場でも必須です。外国人観光客や留学生へもアピールしてほしい！この国語辞典は文法項目がどこよりも充実していてわかりやすいです。」(タツオ)

夏目漱石生誕一五〇年

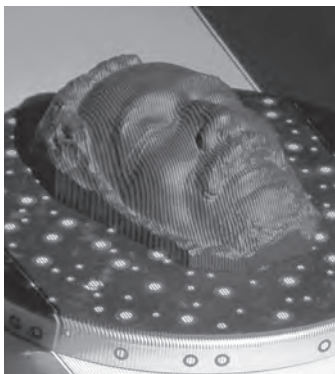
生誕一五〇年という節目を機に、教科書の定番である夏目漱石の作品と、あらためて向き合ってみてはいかがでしょうか。本特集では、漱石に関する最新の研究報告、授業実践をご紹介します。

漱石アンドロイドという謎——「私」とは誰か

やまぐちただよし
山口直孝
二松學舎大学文学部教授

■甦った二松學舎の大先輩

漱石アンドロイド、すでにご存じの方もいらっしゃるだろう。昨二〇一六年十二月八日、夏目漱石の命日に行った完成披露記者会見には多くのマスコミが詰めかけた。夕方に民放のニュースが一報を流し、翌日の朝にはNHKが「おはよう日本」で特集を組んでくれた。新聞各紙も一斉に取り上げたので、多くの人の目に触れたはずである。二松學舎大学は、前身が漢学塾で、若き日の漱石も学んだ。今回の報道で二松學舎との関わりが一層知られるようになったのは喜ばしい。



右上：3D スキャンにかけられた夏目漱石のデスマスク
右下：二松學舎大学大学院研究チームの会合
左：完成披露記者会見で朗読する漱石アンドロイド

漱石アンドロイドとは、夏目漱石をつくりの人型ロボットである。二松學舎の常任理事西畑一哉が創立百四十周年の記念事業の一つとして提案したことが製作のきっかけであった。二松學舎の大先輩を現代に甦らせ、話をしてもらう——、少し前なら夢物語に過ぎないが、アンドロイド研究の第一人者である大阪大学大学院基礎工学研究科の石黒浩教授に監修を快諾してもらい、計画は動き出した。朝日新聞社にデスマスクや写真などを提供してもらい、また、漱石の孫で漫画研究家の夏目房之介学習院大学教授に声の協力を求めた。目標としたのは、旧千円札の

肖像の基となった一九一二年九月の写真、四十五歳の時の風采の再現。背広や靴など身に着けていたものは、遺品や写真を参考にして特注し、白髪のまじり具合や微笑ませ方など、細部にも気を配った。資料が充分でなく、想像で空白を埋める難しさはあったが、作業は予定通り進み、お披露目の日を迎えることができた。

漱石アンドロイドは、座位型で、全身四四か所に埋め込まれた空気圧アクチュエーターによって精巧な動作ができる。シリコン樹脂を用いた皮膚は、毛穴まであり、しっとりとしている。間近で見た人は、一様にそのリアルさに驚いていた。発声や動作は、現在は遠隔操作に頼っているが、将来的には人工知能で自律的に人とやり取りすることを目指している。

■漱石アンドロイドの講義内容

漱石アンドロイドの制作を機に、二松學舎大学大学院文学研究科と大阪大学大学院基礎工学研究科とは協定を交わし、共同研究を始めた。従来なかった文理融合の学際研究の始まりである。

メンバーは定期的に集まり、議論を重ねている。



漱石アンドロイドにどのような朗読プログラムを組み込むか、それにふさわしい動作は何か、接した人の反応を測る最適の尺度は何か、観察の主眼をどこに置くべきか、など検討課題は多い。文学作品の思想や感性を論じている人間にとって、データを積み重ね、客観性を得ることを重視する理系の発想は大きな刺激となった。漱石アンドロイドの人への影響を分析していく上で、精密な手続きは強い武器となることを認識させられた。

漱石アンドロイドを作った目的の一つに、教育への利用がある。作品の朗読や自作解説を聞かせることで文学に対する興味を喚起する。百年前にこの世を去った文豪に会えるとは、誰も思っていないだけに、訴える力は大きいだろう。現在までに作成したプログラムは、『夢十夜』（第一夜）、『坊っちゃん』『吾輩は猫である』、それに漢詩についてである。本文の一節を選び、簡単な自作解説を添える。話の内容は、資料を踏まえて、漱石ならこう言うのではと想像を膨らませてみたものである。

例えば、『坊っちゃん』では、主人公の「おれ」が四国辺の中学校に赴任し、校長を始めとする教員たちに挨拶する場面を選んだ（二）。赤シャツや山

はなかった。漱石アンドロイドも、成り立ちやエピソードを紹介するだけである。本人と同じく控え目なわけであるが、記録に残っている発言に終始すると、再生機と変わらない。森鷗外や芥川龍之介など、同時代の作家たちについてどう思っていたのか。率直な声も聞いてみたい。また、現代日本についての批評を期待する人もいるだろう。事実から離れつつ、漱石らしさを保つことを念頭に、プログラムを工夫しているところである。しかし、そもそも「漱石らしさ」とはどういうことだろうか。

■漱石の探究、「私」の探究

漱石アンドロイドによる授業は、完成と同時に始まっている。『夢十夜』朗読を皮切りに、中学生から大学生までを相手に、演習や講義などさまざまな形態で漱石アンドロイドに語らせ、アンケート調査によって反応を分析しているところである。

漱石アンドロイドの磁力は、相当のものである。視線が合った生徒は、何らかの身体的反応を示す。漱石アンドロイドの一礼に挨拶を返す受講者の多さには、正直驚かされた。話を聞く姿勢も真摯で、集中が途切れない。

嵐との初対面を果たす、有名な箇所である。漱石アンドロイドには、次のように喋ってもらった。「自分で言うのも変ですが、なかなか歯切れのよい文章で、百年後のみなさんがお聞きになってもよくわかるのではないのでしょうか。江戸っ子の坊っちゃんかと思った通りのことを言葉にしているのは痛快ですね。私も江戸っ子ですが、坊っちゃんのように威勢よくは話せません。どちらかと言えば、実際の私は教頭の赤シャツに近い存在かもしれませんが。もちろん、赤シャツのような恰好はしませんでした。が」。

漱石アンドロイドは、白いニットベストにツイードの背広といういでたち、教壇に立つことを想定した、よそよそきの恰好である。話し方も、やや改まったものになる。『坊っちゃん』に関する話は、「私の個人主義」の「赤シャツはかくいう私の事にならないければならぬので」などの発言を参考に、尊大な感じにならないよう留意しながら作ってみた。漱石はユーモアの人で、講演でも随時冗談をまじえて聴衆を湧かせている。笑いも盛り込みたいと頭をひねるが、なかなか難しい。

作品の理解は、基本的に受け手に委ねられている。漱石は、自作についてくどくどしい説明をすること



二松學舎大学附属高校の生徒を対象とした授業

『夢十夜』の「第一夜」は、周知のように、「百年待つていて下さい」という言葉を遺して亡くなった女性が百合として甦る話である。十編の中で最もロマンティックな一編を、本人による朗読という触れ込みで聞いてもらった。「第一夜」の朗読は、女性が受け持つことがしばしばある。ヒロインに向けられがちな意識が、今回は女性を見守る「自分」にも振り分けられたようである。「作品がより広がりを持つように感じられた」という感想が複数あったのは、漱石アンドロイドの声が作品の多層性を掘り起こしたからであろう。

漱石アンドロイドの印象は、年齢が低いほど大きく広がり、また男性より女性の方が劇的な変化が経験される傾向があることが確認されている。ただし、これらの所見は、ほかのアンドロイドにおいても得られている。当然、漱石アンドロイド固有の特性を見出さねばならないが、楽な課題ではなさそうだ。

春先、漱石アンドロイドは、京都のアサヒビール大山崎山荘美術館に出張した（四月十四日～十六日）。これは、山荘をかつて漱石が訪れた縁で、特別展「漱石と京都」に招かれたものである。英国風建築の一室で行われた朗読会は、毎回満員の盛況で

える上で大きな手がかりである。ただし、オーラが漱石に由来するのか、アンドロイドに根拠を持つものかは、まだ判然としない。また、「漱石」の部分が定まっているわけでもないのが厄介である。年齢や職業の異なる観客は、漱石に関する知識や関心も同じではないはずである。にもかかわらず、人々は漱石アンドロイドに接して等しく納得の表情を見せる。どうやら人は、思い描いている漱石像と重なる部分を漱石アンドロイドに見出し、満足を覚えているらしい。漱石アンドロイドは、多様な「漱石らしさ」を受け入れる媒体の役割を果たしている。比喩的に言えば、漱石アンドロイドは心を映し出す鏡なのである。

「冷たい鏡のうちに、自分の影を見出した時、不図この影は本来何者だろうと眺めた」（十三）のは、『門』の主人公宗助である。師走の髪結い床で抱いた宗助の感慨は、漱石アンドロイドに関わる者のそれでもある。通常文学研究者は、対象の作家を実体的に思い描くことがない。あいまいな輪郭のまま、自分に都合のいいイメージを作り上げていることも少なくないだろう。今回漱石の物理的な再現を実現したことによって、人物像なるものが不定形であり、



「文学入門」（二松學舎大学文学部一年生対象）

あった。漱石アンドロイドが姿を見せると、観客からは嘆息が挙がっていた。様子を見ていた石黒浩教授は、会場を覆った独特の雰囲気打たれたと言う。どうやら、参加者を一瞬にして非日常の世界に引き込むオーラのようなものを、漱石アンドロイドは備えているらしい。

オーラの発見は、漱石アンドロイドの単独性を考

多様でありうることが浮かび上がってきた。漱石アンドロイドと向きあう時、自身の漱石に対する見方の不確かさに気づかされ、たじろがされることがある。漱石アンドロイドの研究は、必然的に「漱石」の探究、さらには他者にまなざされる「私」の探究へと展開していくことになる。百年前の漱石が自我の葛藤を見極めようとしたのと同じく、それはすぐれて文学的な課題であろう。漱石アンドロイドをめぐる謎、百年とは言わないまでも、解くにはそれなりの時間がかかりそうである。



アサヒビール大山崎山荘美術館での朗読会

「国語」教科書と夏目漱石

むとうせいご
武藤清吾
琉球大学教育学部教授

■「国語」教科書への登場

「国語」教科書に夏目漱石の作品が掲載され始めたのは二〇世紀初頭である。一八九九（明治三二）年の「中学校令改正」「高等女学校令」によって「国語」教育体制が確立し、「文学上ノ趣味ヲ養ヒ兼テ智徳ノ啓発ニ資スル」という目標が掲げられ、「現時ノ国文ヲ主トシテ講読」することになった。

教科書も刷新され、文学作品などの新教材が採用され始めた。漱石の場合は『吾輩は猫である』『草枕』『坊っちゃん』『倫敦塔』『二百十日』『抗夫』『虞美人草』『夢十夜』『文鳥』『永日小品』『思ひ出す事など』『ケーベル先生』『満韓とところどころ』『文学論』『文学評論』が採られ、俳句や書簡も入れられた。

この背景には、垣内松三の「創造的読方」論（『国語の力』不老閣、一九二二）、西尾実の「注解・解釈・主題・構想・叙述」の「国語」教育論（『国語国文の

教育』古今書院、一九二九）を理論的基礎にした教科書編集があった。垣内は、『国語の力』の執筆にあたり、漱石の『文学論』に多くを学んでおり、西尾も垣内の理論を継承していたのである。

■『近代日本文芸読本』と『国文新選』『国語』

「国語」教育において文学が読まれる環境は、文学創作の側の文芸実践によってもつくられた。文芸実践とは、特定の個人あるいは集団が文芸を創造し享受することで、さらにその後生み出される再創造への可能性に自覚的になっていく実践をさしている。それは未評価の作品を評価して共有しようとする提案的な実践でもあった。

その典型が芥川龍之介編『近代日本文芸読本』（興文社、一九二五）であった。収録されたのは、明治大正の一二〇名の作家による小説、随筆、日記、戯曲、詩歌、評論、翻訳一四八編である。『白樺』『帝

国文学』『アララギ』など、同時代の文芸結社の機関紙誌、雑誌、新聞などから作品が採られている。影響力のある作家が編集した「国語」副読本の効果は大きく、これからの読者層となる中等学校生徒向けに、文壇の多くの作品を選定することで、それらがカノン（正典）としての意味を持ち始め、その時代を束ねる規範になった。「国語」教科書にも『近代日本文芸読本』の影響が見られ、一九二〇年代後半には多様な作家の作品が掲載された。

『近代日本文芸読本』は、漱石の作品は二編しか採用していないが、『永日小品』『文学評論』の収録という点が重要である。垣内の旧制高校教科書『国文学体系 現代文学』（尚文堂、一九二六）に『草枕』『文芸の哲学的基礎』が掲載されたこととの類似性は明らかである。

さらに西尾が中心となった岩波編集部編『国語』（岩波書店、一九三四）は、垣内らの編集した教科書『国文新選』（明治書院、一九二五）を継承して事実上の単元編成を採った。各巻の巻頭と巻末には、島崎藤村、小泉八雲、吉村冬彦、安倍能成、芳賀矢一らが配され、自らの「生きた言葉」「生涯稽古」などの書き下ろし教材も入れた。これは『近代日本文芸読

本』が漱石や鷗外らを配した方法と同様で、それ自体が教科書のメッセージとなっている。それまでの教科書の雑纂式の編集から単元編集へと移行したのである。また、『国文新選』『国語』と『近代日本文芸読本』は作家や作品の共通性も大きかった。

『国語』には藤村の作品とともに八雲の作品が多数収められた。藤村の随筆や詩、小説、紀行の六編、八雲の随筆や小説、評論の五編が収録されている。特に藤村の「結晶の力」と八雲の「制作の方法」、西尾の「生きた言葉」「生涯稽古」からは、創造の学びを重視した単元で構成された教科書であることがわかる。

漱石の作品では、『国文新選』には『満韓とところどころ』『二百十日』『草枕』『吾輩は猫である』『虞美人草』『カーライル博物館』『文鳥』『抗夫』が掲載され、『国語』には、『草枕』『文鳥』『夢十夜』『ケーベル先生』『草枕』『思ひ出す事など』が収められた。

西尾は、『国語』に漱石作品を多く採用して、テクストの熟読をもとに話す・聞く・書くという創造的な言語活動を中学生に呼びかけたのであった。『国語』は、当時の旧制中学校の七割以上で採択された。『国文新選』『国語』に多くの漱石作品が収められた



影響は大きかったのである。

■戦争の不安とその忌避

一九三〇年代後半には教授要目が改訂され、国家総動員体制下で「国民精神の涵養」のための教材採録が要求された。一九四〇年代の文部省編『中等国文』『国文』には漱石も芥川も登場しない。西尾はこの編集にも携わったが、すでに彼の思いが実現できる場はなかったのである。

その点では、漱石の『点頭録』（朝日新聞）一九一六・一・一二の存在は重要である。「軍国主義」で「独逸によつて今日迄鼓吹された軍国的精神が、其敵国たる英仏に多大の影響を与へた事を優に認めると同時に、此時代錯誤精神が、自由と平和を愛する彼等に斯く多大の影響を与へたことを悲しむ」と書き、戦争のもたらす悲劇を描いている。

漱石が戦前の教科書に多数採用された背景には、戦争体制によつて当時の文芸実践や教養実践から自由が奪われる「不安」を感じ、戦争の本質はすべてを破壊することであると考へた教育関係者の戦争を忌避する意識が投影していたと思われる。

■「国語」教科書の「こころ」

『こころ』は戦前の「国語」教室でも読まれていた。

が「平和教育」「民主主義教育」「児童・生徒中心の指導法」「問題解決能力の重視」を掲げ、それを受けた国語科編には「高等学校国語科の単元の例」が示されている。たとえば、第二学年の単元「短編小説」では、「作品をよく味わい、余暇を楽しく過すために、短編小説をどのように読み、どのように書いてみたらよいか」と副題されている。

この後、「高等学校学習指導要領 国語科編」が一九五五年、六〇年に告示される。六〇年版は、心情を豊かにして言語生活の向上を図る、目的や場に応じた表現態度や技能を養うことなどが目標とされ、その方針に沿った『現代国語』教科書の多くが『こころ』を採録したのである。

新制高等学校の教科書には、戦前の収録作品を除外するだけでなく、まったく新しい作品教材を収録するという発想が生まれるのは当然であった。五五年の『国語（甲）』の時期が教材刷新の模索期であり、『現代国語』の時期に教材の総入れ替えが行われた。高等学校では、漱石は『三四郎』から『こころ』、芥川は『鼻』から『羅生門』、鷗外は『安井夫人』から『舞姫』というぐあいに作品が入れ替わった。中学校では『少年の日の思い出』『走れメロス』『故郷』など

野地潤家『昭和前期中学校国語学習個体史』（溪水社、二〇〇二）には、伊予の中学校で教師が「わたくしと先生」を自らの体験のように語ったことを契機に生徒たちが競って『こころ』を読んだとある。

また、筒井清忠『日本型「教養」の運命』（岩波書店、一九九五）によると、一九三八年頃の成城高校生が感銘を受けた書物として『草枕』『心』が上位にあり、四四年の第五高等学校生の一位は『こころ』であった。旧制浪速高校同窓会が行った高校生時代の愛読書調査（一九七六年）でも「心」が二位である。旧制中学校を卒業して教師になる場合もあったことを考えると、西尾編『国語』に漱石が収録されたことの影響をここからも確認できる。

『こころ』が「国語」教科書に登場するのは一九五六（昭和三一）年の『高等国語二』（清水書院）である。「上 先生と私」（一部）が初めて収録された。その後、一九六三年の『現代国語二』（筑摩書房）掲載を契機に『こころ』の収録が増え、七〇年代には大半の教科書が掲載するようになった。

その背景として考えられる最も大きな出来事は、一九四八年の新制高等学校の誕生である。一九五一年に「中学校高等学校学習指導要領 一般編（試案）」

が収録された。太宰治、安部公房、梶井基次郎、大岡昇平らの新しい作品が教材として登場したのも『現代国語』の特徴であった。

注目すべきは、個々の作品が単独で入れ替えられたのではないということである。それぞれの教科書で、いくつかの大きな単元テーマが決められ、それにふさわしい作品が採録された。たとえば、「ことばと生活」「読書」とともに、「人生の探究」「世界への窓」という単元が示され各教材が配置されている。ここには、言語生活への関心とともに、世界と日本、アジアと日本という単元意識を見ることができる。新生日本のもとの個性の確立、教養の獲得、社会への批判力を実現する学びとしての単元の設定が世界と個人の観点から行われたのである。この時期に収録され共通教材となったものには、翻訳、翻案、外国が舞台という特徴に加えて、個人の生のありようを描く作品が多いという点を指摘できる。

こうした単元構成を戦前から求めてきた西尾実が編集の中心になった『現代国語二』が『こころ』を掲載したことがきっかけで、その収録が大幅に増えたことは偶然ではないことがわかる。

「百年」はいつ来たのか？

―「第一夜」(『夢十夜』)における〈夢の論理〉

やまとりようすけ
山本亮介
東洋大学文学部教授

『夢十夜』の「第一夜」の解釈において、「『百年はもう来てゐたんだな』と此の時始めて気が附いた。」との結びが争点になることは言を俟たない。ここに至って「自分」は、「女」を待つ「百年」が経過していたことを、その到来から遅れて気づく。では、「百年」は――あるいは「女」は――いつ来たと考えられるか？ 結びの一文を導出する諸要素〔暁の星〕の瞬き、百合との接吻、花弁に落ちる露、茎の伸長・蕾の開花……〕は、「百年」の到来とその自覚の連関をさまざまに想像させるだろう。むしろ、抽象度の高い掌編ゆえ、確定的な解釈に達するのは難しい。たとえば大学の教室で検討すると、「百年」および「女」の到来に関して、〈客観〉的証明の不可能性、「自分」の認識の〈主観〉性といった指摘に議論が収斂し、〈要はすべて「夢」の中の話〉との結論？ に落ち着くこともしばしばである。

分」に、「女」が「にこりと笑つて」返す、「そら、そこに、写つてゐるぢやありませんか」のひと言である。みずからの死を前に、「女」は「ぱつちりと眼を開けた」。「自分」が覗き込むように見つめると、「其の真黒な眸の奥に、自分の姿が鮮に浮かんでゐる」。互いの心を確認するように見つめ合う（はずの）局面にあって、二人の視線は確かに相対しているものの、そこに根源的な不透明性が示唆されてしまう。生の世界にある「自分」が、死にゆく「女」が眼にしているもの、「女」がいま感じ取っているものを知ろうとするほど、相手を鏡とした自己像が「鮮に浮かんで」くる。他者に注いでいたまなざしや思いも、結局は自己へ向けられたものにすぎない。自他関係の、〈愛〉の原理的なアポリアであろう。理解の頼りとなるべき言葉も、「女」の眼に見えているのは、「そこ」（鏡としての他者）に映る自己像を眼にした「自分の姿」である、と示すにとどまる。永遠の別れを前に気づかされるのは、二人がともにすごした時間とは、自他関係の不透明性に貫かれた、充足不可能な〈愛〉の経験としてあったことだ。

『行人』では、他我理解に苦しむ「一郎」が、「テレパシーか何か」の実験を妹に試み、気味悪く思わ

「第一夜」を読み深め、その世界観の奥行きに触れるには、こうした問題を踏み越える考察が必要となる。いったい「百年」はいつ来たのか、「自分」はいつ来ていたと考えているのだろうか――。小論では、この問いをめぐるとのアイデアを示してみたいと思う。

はじめに、「百年」の約束を交わす「自分」と「女」の関係について確認しておこう。二人がどれほどの年月に渡り、いかなる関係を築いてきたのか、作中の情報から読み取ることはできない。さしあたり一般的な物語コードに準じて捉えるなら、二人は〈愛〉の関係にあったと想定することになろう。〈愛〉する二人が、今生の別れに際している。「自分」の語りを通して、「大きな潤のある」「黒眼」を持つ「女」の姿や、短い言葉のやり取りが記される。なかでも印象的なのが、「私の顔が見えるかいと一心に」問う「自

れるくだりがある（『塵勞』十一）。自他関係の底には、根源的なデイスコミュニケーションが存しよう。仮に〈愛〉の関係を自他合一の様態と見なすなら、やはりそれは自己中心のかつ実現不可能な理想像にすぎないのだろうか。あるいは、少なくとも自他が何らかのものを共有する関係を、根本にある問題性を打ち消さぬままに構想することはできないだろうか。

ここに浮上するのが、墓の傍らで「百年」待つという〈約束〉である。「自分」が〈約束〉を果たしたとき、「女」は「屹度逢ひに来ます」と言う。あるいは、「女」が「又逢ひに」来たとき、両者による〈約束〉の履行が同時に証明される。〈約束〉とは、他我を推し量る試金石にほかならず、その帰趨次第で不透明な自他関係に何らかの形が与えられる（可能性を持つ）。どれほどの断絶とアポリアに直面しようとも、相手と世界をともにし、（再び）相対することを求める――この思いの共有・証明が、いま〈約束〉に賭けられたのだと言えよう。

ただし一個人の人間にあって、「百年」とは自己の生死を超えた〈永遠〉の時間に比する。それは定義上、決して現実に到来することはない。このことは、たとえ何らかの〈約束〉が実現したとしても、自他



関係の不透明性が払底されるわけでなく、他者は届かぬものとしてあり続けることに相即しよう。ゆえに、すべては自己の夢想でしかない。では、その夢の中で、「自分」は「百年」待ち、そして「女」は「又逢ひに」来たのだろうか。そもそも、仮に「女」が「百合」となつて「又逢ひに」来たとするなら、それこそ「自分」の抜き難いナルシズムを露見させる結末ではないか。鏡に映る自己像を愛していた「自分」は、最後は物言わぬ植物と接吻する、あたかも愛し合っているかのように……。こういった夢のシニシズム、ないし夢の真理もまた、「第一夜」解釈のひとつであろう。

そうした問題を念頭に置きつつ、「自分」の夢想をさらに突き詰める方向で、「約束」の行方を探ってみよう。補助線とするのは、「第一夜」解釈に多くの示唆を与えてきた『それから』の表現内容である。「三千代」の印象的な「黒い、湿んだ様に暈された眼」、「代助」が結婚祝いに贈った「真珠」の指輪、そして何よりも百合の花が、再会の物語を象徴的かつ現実的に導いてゆく。特に着目したいのは、『それから』における百合が、一度は切断された過去と現在を、とりわけその香りの力で結びなおすこ

あくまで理想化された「夢」――「一刻の幸」にすぎない。ひとたび夢から覚めてしまえば、唇が触れるほどに近づいても、百合の香りによる忘我は訪れない。そして、「夢」――「一刻の幸」の反動である「永久の苦痛」だけが、現実の世界に残される。

「第一夜」の「自分」は、夢の中で百合の香りを嗅ぐ。『それから』の一節と合わせて考えるなら、それは夢の中で「理想化された過去の夢」を見ること、ひいては「永久の幸」の輪を生み出すことだとと言えるかもしれない。最初の問いに戻ろう。いったい「百年」はいつ来たのか。「骨に徹へる程」の香りを放つ百合、その「花瓣」に接吻した「自分」のもとに、「女の過去」と「離すべからざる、わが昔の影」が浮かび上がる。ともに生きた過去は、「幸」に満ちた世界として「再現」（理想化）される。再来を約束した「百年」の時間は、二人が出会った「自然の昔」に「もう来てゐた」のだ、このときそう思い至ったのではないだろうか。

『永日小品』中の幻想譚「心」では、「百年の昔から此処に立つて、眼も鼻も口もひとしく自分を待つてゐた顔」の「女」が現れる。「第一夜」の「自分」は、永遠の時を待ち続けた果てにかつて、「女」と逢

とである。告白を決心した「代助」は、百合を用意した部屋で「三千代」を待つ。

代助は、百合の花を眺めながら、部屋を掩ふ強い香の中に、残りなく自己を放擲した。彼は此嗅覚の刺激のうちに、三千代の過去を分明に認めた。其過去には離すべからざる、わが昔の影が烟の如く這ひ纏はつてゐた。彼はしばらくして、／「今日始めて自然の昔に帰るんだ」と胸の中で云つた。（中略）彼は雨の中に、百合の中に、再現の昔のなかに、純一無雑に平和な生命を見出した。（中略）さうして凡てが幸であつた。だから凡てが美しかった。／やがて、夢から覚めた。此一刻の幸から生ずる永久の苦痛が其時卒然として、代助の頭を冒して来た。（中略）彼は立つて百合の花の傍へ行つた。唇が瓣に着く程近く寄つて、強い香を眼の眩う迄嗅いだ。彼は花から花へ唇を移して、甘い香に咽せて、失心して室の中に倒れたかつた。（十四の七）

充滿する百合の香りから現れ出た過去は、すべてが「幸」としてあつた「自然の昔」、観念的夾雑物のない二人の世界であつた。もちろん、「代助」が「純一無雑に平和な生命を見出」す「再現の昔」とは、う、い、が、で、きた、のだ（これが荒唐無稽にすぎないなら、永遠に近い時間を持つてでも再び逢いたいと願う他者と、過去をともにできた「幸」にいま気づいたとしてもよい）。二人の邂逅を運命的なものと意味づけ、「再現の昔のなかに、純一無雑に平和な生命」を見出すときにのみ、「愛」の夢を見続けることが可能となる。

再会としての出逢い、未来の「約束」による過去の再生――ここには倒錯した論理がある。「女」を「百年」待ち続けようとした、それゆえに、過去において「女」と逢えたことになるのだから。いわば「前世の約束」をめぐる一ヴァリエーションとしてもよいだろう。

こうして、メビウスの輪のように円環する現在と過去、理想的に永遠化される「再現の昔」、言うなれば「夢の論理」の中に「自分」は身を置く（「こんな夢を見た」と語る存在は措くとして）。いつ何時自他関係の深い闇に取り囲まれるかわからずとも、他者とともにある時間の永劫回帰に賭けること。この志向を、やはり自己中心的な戯画とみるか、あえてロマンチズムの可能性と受けとめるか。「第一夜」が問うところと言えよう。

宮崎駿になった夏目漱石——「草枕」復活プロジェクト

あとがみしろう
跡上史郎
熊本大学教育学部准教授

■「草枕」かつての輝き

夏目漱石「草枕」は、基本的には現今の国語教科書には掲載されていない。

しかし、時代を遡ってみるならば、「草枕」こそは、かつての定番教材であった。橋本暢夫『中等学校国語科教材史研究』（二〇〇二・七、溪水社）によれば、旧制中等学校の読本中、漱石作品は三〇五種、八七八冊に収録されている。現在定番化している「坊っちゃん」が一回しか出てこず、『こころ』の教材化にいたっては戦後になってからであるのに比して、「草枕」はなんと四〇七回も出てくる。次点の『吾輩は猫である』が一九五回であることと比べてみても、突出した掲載回数である。「草枕」を教材として復活させることはできないのだろうか。

■復活の切り札

一方、二〇〇八年夏に公開されたスタジオジブリ

の映画『崖の上のポニョ』の宣伝で、宮崎駿監督が夏目漱石のファンであり、しかも特に「草枕」を愛好し、映画にもその影響があるということが公式情報として発信された。さらに二〇一〇年十一月に、宮崎駿は「草枕」の舞台のモデルとなった熊本県の小天にやってきた。スタジオジブリ社員旅行の行き先選ばれたのである。

「草枕」に興味がなくても、宮崎駿、ジブリアニメならば興味を示す者は多い。なんとか宮崎駿から漱石、「草枕」への連絡通路を作ることができないだろうか。私はここ数年、高等学校等への出前授業で、この課題に取り組んでいる。

■勘所は因果関係による筋IIプロット

「草枕」と宮崎駿の関係において、考えるべきは、物語の展開構造に関する問題である。「草枕」は西欧近代小説の因果関係が作り出す筋IIプロットを重

視する物語展開のあり方に反旗を翻した挑戦的な小説であり、宮崎駿もまた因果関係による理解が基調をなすような単線的な物語のあり方に反抗することで、世界的な評価を不動のものにしてきた映画監督だからだ。

■まずは事実から

先に触れたスタジオジブリ社員旅行時に、宮崎駿は、漱石が実際に宿泊した前田家別邸の離れの部屋で写真に収まっているが、これが実に上機嫌のニコニコ顔なのだ。この写真は、草枕交流館発行の『春星』第八号（二〇一一・四）に掲載されており、「漱石作品はどれも好きで、よく読んだが、中でも『草枕』が一番面白い」というコメント付きである。前田家別邸は、もちろん「草枕」の主人公画工が寝泊まりする志保田家のモデルであり、その離れは二〇一三年の『風立ちぬ』でも、主人公が住む部屋のモデルとして使用された。

さらに、『風立ちぬ』公開にまつわる半藤一利（義祖父が漱石）との対談本『腰抜け愛国談義』（二〇一三八、文藝春秋）での宮崎発言が極め付けである。「ぼく、『草枕』が大好きで、飛行機に乗らなきゃいけないときは必ずあれを持っていくんです。どこか

らでも読めるところも好きなんです。（中略）ぼくはほんとうに、『草枕』ばかり読んでいる人間かもしれない（笑）。

「どこからでも読める」というのは、「草枕」の画工のセリフ「ただ机の上へ、こう開けて、開いた所をいい加減に読んでるんです」に忠実に従ったものである。これが一般人には非常にわかりにくい。ここからが宮崎アニメの出番である。

■最初の問い

まず、生徒たちに問うのは、『天空の城ラピュタ』（一九八六）のあらすじが言えるかである。これは、だいたい言える。細部はいろいろでも、大筋はそんなに違わない。次に、『崖の上のポニョ』のあらすじが言えるかを問う。『千と千尋の神隠し』（二〇〇一）で代替してもよいのだが、いずれにしても、答えはかなりしどろもどろになる。

理由は、宮崎駿が回を重ねるごとに物語のパターンを崩して、因果関係がよくわからない物語を作ってきているからである。

「お姫様が悪党にさらわれたので救出に向かい、悪を打倒したら宝物が現れた」といったようなパターンや因果関係が明確な話は、その型に従って記憶



したり再生したりすることが容易である。ところが、宮崎駿はそのようなパターン化を「頽廢」と見做し、物語の型や因果関係から自由になろうとしてきた。ゆえに、宮崎駿の営為後半になるほど宮崎アニメの物語展開を記憶し再現することは難しいのだ。

『ポニョ』の物語途中で大魔法が発動すると、町は海に沈んでしまう。この展開は唐突であるが、記録映像『ポニョ』はこうして生まれた。↓宮崎駿の思考過程(『二〇〇九・一二、ウォルト・ディズニー・スタジオ・ジャパン』を観ると、宮崎駿が、映画制作途中で突然この予定外のアイデアを思いついていることがわかる。特に映画後半は、設計図である絵コンテの完成がフィルム制作に間に合わず、宮崎駿は追い詰められ、通常の理性の箍が外れるようにして、意外な展開が決められていくのだ。

そこにあるものは、まるで、女の子が狼に食べられてしまったまま助からない「赤ずきん」のオリジナルバージョンのような理不尽さ、近代以降子供向けに書き直される以前の昔話のわけのわからなさと同質であるが、私たちはそういうものだと思って受け入れてしまう。宮崎アニメの持つ、筋の興味を上回る映像の美しさの力も大きいだろう。

である。見かけ上「くすればくだ」にはなっているが、鐘をつくことと銀杏が散ることの間には、なんの因果関係もない。

もともと漱石でさえ、修行期には正岡子規にダメ出しを食らっているのだよというエピソードも付くわえておくのがよいだろう。漱石の

花芒小便すれば馬逸す

に対する子規のコメントは、「小便ノために馬を逃がしたるハ理屈ありてよからず」である。これは、小便をしていたことが原因となって馬を逃してしまっただけという「因果関係」による説明であって、俳句としては不出来なのだ。

■未来の国語

このような俳句修行の上で西洋に赴いた漱石であるから、西洋流の言語表現そのものは、なんら普遍的なものではなく、仰ぎ見る対象ではないと思っっている。だったら洋の東西を超えた言語表現の普遍的地平はどこにあるのか。そのような探求の姿勢が生んだのが「草枕」なのだ。

どうやら、「草枕」復活には、伝統的言語文化に関する腰の入った教育との連携が必要なようだ。そこには、小説中心主義的な因果関係、あるいは因果

■俳句的小説の「俳句的」とは？

「草枕」もまた、展開がややふやで、ときに時間が停滞し、筋の興味がどうでもよくなってしまうような奇異な小説である。漱石自身は「草枕」を「俳句的小説」と言っている。俳句的であることは、プロットを逆方向から考えることにもつながるのだが、従来この問題は正面から検討されていない。この問題を理解してもらうために、私は、正岡子規「柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺」の元になった、漱石の俳句を用いている。

○○○○ば銀杏ちるなり建長寺

俳句の素人に、この「○○○○ば」の部分を埋めてもらうと

風吹けば銀杏ちるなり建長寺

雨降れば銀杏ちるなり建長寺

等、銀杏がちる原因を理屈で考える。中には、

木を蹴れば銀杏ちるなり建長寺

と、どうあっても銀杏をちらそうと努力する者もいる。根本にあるのは、文学的表現を因果関係で捉えようとする小説中心的な発想であろう。

しかし、俳句の発想は異なる。漱石句の正解は、鐘つけば銀杏ちるなり建長寺

関係による心情表現とは別の表現の規則がある。

宮崎駿が愛した「草枕」の背後には、小説(プロット)の原則とは裏の関係にある俳句(非プロット)の原則が隠れている。宮崎駿は俳句を意識しているわけではないが、別の経路をたどって、漱石と同じ地点に立ち至ってしまったようだ。漱石の言語表現を理解するリテラシーの獲得は困難だが、宮崎アニメを理解するためのリテラシーは、私たちは子供の頃から鍛えられている。

美術にも深い関心を抱き、水彩画を描いたり、著作を自ら装丁したりしている漱石は、「草枕」を始めとする小説群で、言語表現と絵画表現を同一地平で捉える実験をしていた。現代の画工・宮崎駿によるアニメーションは、ひょっとしたら漱石が実現できなかった理想なのかもしれない。だとしたら、漱石は、宮崎アニメとして現代に生き続けていたのではないか。

それは、単線論理的なものではなく、多面的で総合判断的で複雑で美しく、そしてなによりも国民皆で楽しむことができるエンターテインメント、おそらく未来の国語の夢なのだ。

教室で読まれる『こころ』——「私」は「明治の精神」を批判する

しのほらたけし
篠原武志
洛星中学・高等学校教諭

■生徒の状況と授業の着想

本校は男子校（一学年45人×5クラス 文理混合2クラス 理系3クラス）である。世間では進学校という見方をされているが、必ずしも国語に關してはできる生徒ばかりではない。高二の二期に『こころ』の授業をした。予め夏休みには『こころ』全文通読を課題とした。さて、本校生は以前の学年で実践したときも初読感想で「明治の精神」に興味を示す生徒が多かった。それならば、いつそそこを支点にしてみようというのが本実践である。

■授業の概要

- 夏休み 『こころ』（新潮文庫）全文通読
第1時 初読感想を書く
第2～10時 『こころ』『下』についての読解
第11～14時 『こころ』全体についての読解

ればこの小説は幸福な結末を迎えていたような気がする。

①の生徒は「お嬢さん」を傷つけまいとする気持ちの故に先生が自殺に踏み切ったとしている。「お嬢さん」に対する百パーセントの愛情を、先生の態度から感じ取っているのだろう。それは現実にはあり得ない観念的愛情である。

■生徒の考えた先生・K

教師 百パーセントの恋愛なんて、やっぱりリアルズムでは成立しないのよ。

生徒 そういう意味では、先生は奥さんを自分の理想に、自分の手の内に死んでもとめておこうとしているってことになる。

教師 今の指摘は重要ね。先生っていうのは、自分の中で理念の世界を作る人物だったってことね。

生徒 それって女性蔑視じゃないの？

教師 そうともいえる。ある意味でその女性の本当の声を聞かないわけでそれも時代と無関係ではない。

生徒 先生、「明治の精神」っていうのもそれなの？
教師 それは関係はある。Kが「道」とか「精進」

第15時 まとめの批評文を書く

初読感想を生徒に配布し、それについて議論する形式で授業を進めた。ここでは①先生とKについての初読感想と議論、②語り手の「私」についての初読感想と議論、③まとめの批評文を紹介する。

■初読の感想①

先生という人物は観念的世界を生きる人物と考えられるが、生徒は先生をどう捉えたのであろうか。以下、生徒の初読時の感想である。

- ① 子供の頃に両親と死に別れ叔父にだまされたことで他人に対してまず不信任を抱くようになった。Kの自殺や結婚を通じて彼は自分の心の成長を自覚していたかもしれないが、やっぱり最後までどうしようもなく弱い人物だった。思い切って妻に全てを打ち明けるだけの強さがない。

っていう言葉をよく使うように、すごく真面目なのは間違いない。その真面目さから見たとき、恋そのものも抑圧するべきものやったわけやけど、ヒトである以上、それはだけへんかったわけやな。生徒 「精神的に向上心のないものはばかだ」。「こころ」は忘れてもこのセリフは忘れなさそう。教師 つまり、Kは自分を精神的向上心のある人にしておきたかった。しかし、恋をした自分はそうではない。

生徒 先生、「道」って、結局どういうこと？

教師 この時代って明治になってだいぶ経ってるやろ。せやから例えばキリスト教の影響なんかもあったわけね。歴史で習ったよねピューリタン。その清教徒は別に財産の私有とか恋とかを禁じたわけではなかったんやけど、Kはさらにそれを推し進めた倫理観念を持っていたってことになる。

生徒 それが「道」？

教師 もう少しあると思う。例えばKの父親って、先生から何て言われていたか抜き出してみて。生徒 坊さんとか裕福とかでなくって？ これかな？ 「彼の父は云うまでもなく僧侶でした。け



れども義理堅い点に於て、寧ろ武士に似たところがありはしないかと疑われます(下・二十一)」「**教師**」そこね。倫理的であることが武士道と結びついていたのが、先生とかKの生きたより前の時代。先生もKもその影響を受けた。でも次の時代は？**生徒** 大正時代？ 大正デモクラシーとかあった。個人の権利とかが叫ばれた時代？

教師 そういう風に考えるとわかりやすい。だから、Kにとって「道」って、昔の武士が名誉を大事にしたように、何よりも大事なものをやった訳や。それは先生も一緒やな。先生はしばしば「自尊心」を口にする。そういう武士道的倫理観——それが観念の世界に通じちゃうんやけど——と個人主義の両方に引き裂かれた時代の精神、それが「明治の精神」なんやな。

■初読の感想②
語り手の「私」については、次のような意見が出された。

② 先生と知り合った頃の「私」は先生という人間に対する好奇心がとて強く、その好奇心がしだいに先生の表面的なものから、内面へと移

っていった。先生の遺書を受けとったことで、先生に対し重い責任が生じたが、それを公表したことは、先生の人生への否定的な主張が感じられる。

■語り手としての「私」を考える

生徒 ②は「私」に「先生の人生への否定的な感じ」があるっていうてるけど、僕はそうは思われへん。

生徒 全体としては尊敬ちゃうの。「これは世間を憚る遠慮というよりも、その方が私にとって自然だからである」って「上」の一で言っている。

教師 まとめると、この手記の基調となっているのは尊敬なんやな。でも②のいうように、お嬢さんに知らせないでくれという禁忌を破って書いているわけからそこには批判的なものもあるやろう。問題は「私」が先生のどの部分を批判しどの部分を受け継ごうとしたか、っていうところにあるな。

■まとめの批評文

こうした議論の上で最終の論を書かせた。

③ 「私」の手記は先生への、そして明治という時代に対しての挑戦状だと思う。明治になって

三十余年、日本は大きく変わらざるを得なかった。しかし、その激動の時代でも日本人の心は変わらなかった。武士道、家長制もその一つだ。そしてやはり消えない男尊女卑の風潮。先生もその影響を受けて育った一人だ。女性と交わりを持たず、学に励んだ若き日の先生やKの存在は当時の日本人の姿そのものと言っても過言ではないだろう。先生の自分の妻に対して持つ感情は最早人間同士の感情ではない。大切な衣類や宝石にしみやきずがつかないようにクロゼットの奥底にしまいこむ所有欲と同意ではないだろうか。先生は女性をよくわからない。唯一自分が愛したそして愛された女性を一個の人間としてではなく、自分の思うカギカッコつきの「愛する」女性一般として大切にしていたのではないだろうか。

しかし時代は変わる。故郷を失い家族をもった「私」は立場を変え、先生をより理解すると同時に批判的な立場を取っている。女性というものについて、愛について「先生」の目線と相違することがわかる。人は汚れていくものだ。しかし汚れさえも愛し合えるのではないか。そ

う思った「私」は「先生」を受け継ぎながら批判し、真っ向から立ち向かう。それがこの手記である。

③の生徒は「宝石」に対するような愛の裏側にある女性を所有物のように扱う考え方こそ「明治の精神」であり、「私」はそれを批判しているという。

■「明治の精神」を批判すること

以上のように生徒は読んだ。とすれば「私」がそうであるだろうように、生徒も先生とは違う道を選ぶべきであろう。先生の「純白」の愛とは異なる世界を、たとえ罪を知ることと愛する人のアイデンティティが変容しようとも現実を生きることを、「明治の精神」とは異なる世界を、ポスト明治を生成し生きるべきであろう。生徒をそうした世界に誘う開かれた通路、それが『こころ』という作品であろう。

*本稿は「教室で読まれる『こころ』——「明治の精神」を鍵語として——」(『同志社国文学』八二号 二〇一四年一月)の内容をもとにしている。

「現代日本の開化」から漱石の思考を探る ——『こころ』の関連教材として

たき あい
玉木 愛
島根県立松江北高等学校教諭

■教材選定について

現代文の「読むこと」の学習には、技能的な側面と価値的な側面があるとされるが、生徒が主体的に読むようになるためには、価値的な側面を重視すべきだと考える。生徒たちの日常生活や学習歴との「つながり」を意識して教材を選ばなければならない。その上で、生徒たちの思考が深まり、広がるような言語活動を展開する必要がある。

以前、『こころ』を教材とする授業で、「明治」という時代に注目し、先生やKの生き方について考察した。これに「つながる」教材として「現代日本の開化」を選んだ。

「現代日本の開化」は、『こころ』が書かれる三年前に和歌山で行われた漱石の講演である。イギリス留学、作家への転身、修善寺の大患を経た、当時の漱石の思考を理解するのに大変有効な教材である。

これを読むことで、『こころ』の授業で行った考察をさらに深めさせたい。そして、明治を生き抜いた漱石を鏡として、同じく変化の時代を生き抜かねばならない自分自身を見つめる機会とさせたいと考えた。

また、本教材は、修辭に注目して理解を深めさせることのできる教材である。『こころ』と同様に多用される比喩表現や、西洋と日本との対比構造、豊富な事例、講演会ならではのユーモラスな表現など、授業の中で効果的に扱うことを意図した。

■実践

【学習目標】

- ・漱石が「明治」という時代をどのように捉え、どのように生きようとしたかを考える。
- ・比喩、対比、事例の提示、ユーモラスな表現に注

目しながら本文の内容を読み取る。

【学習計画】

第1時 『こころ』の授業の課題作文を読み返す。

その上で本単元の課題を設定し、教材について紹介する。

第2～6時 本文を読み、内容を整理する。

第7時 本文の内容を踏まえ、現代の状況やそこでの自らのあり方について考え、課題作文を書く。

【学習の実際】

第1時

本単元の前に行った『こころ』の授業では、「下先生と遺書」を読み、「先生（私）」と「K」の死をも含めた生き方について考察した。授業のまとめとして「漱石が『こころ』で伝えたかったこと」という題で作文を書いたが、その作文を読み返すことから始めた。

『こころ』の授業の課題作文例（抜粋）

○漱石は「明治には尊敬できる人物はいない」と語っている。明治という時代が終わるのと同時に明治を生きた人たちがすべて死んでいったが、その

ことで本当に新しい世の中になるのだと漱石は伝えたかったのではないか。そして新しい世の中を生きる若者たちに、新たな理想を持つて生きていってほしいと伝えたかったのではないか。

○Kも先生も心のある寂しさで死んでいった。それは明治という時代の中で感じる寂しさだと思つた。すべてが目まぐるしく変わる中で、時代に取り残されて寂しくなつていったのではないか。漱石は、寂しさと闘つて生きていかななくてはならないことの大変さを伝え、それに負けないように促そうとしたのだと思う。

○（「先生」と出会つた）「私」＝「読者」なのではないかと思つた。「先生」の遺書は、明治の後の時代を生きる青年へのメッセージなんだと思う。○「私」は明治天皇の崩御と乃木大将の殉死を知つて自殺を決意したので、明治と関係があると思うけど、Kが死んだことも時代と関係があるのかもしれないと思つた。「私」とKの自殺の違いはなんだらう。

このように、「明治」という時代に注目した考察が多かつたことを思い出させ、当時の漱石の思考がどのようなものであつたかを探る資料として「現代



日本の開化」を読むことを伝えた。その上で、この講演に至るまでの経緯や講演の趣旨を説明した。

第2時～第6時

ペア学習により本文を読み進め、以下の(1)～(5)について内容を整理した。太字は取り上げた表現。

- (1) 積極的活動／消極的活動について
- (2) 開化が産んだパラドックスについて
- 「生きるか生きるかという競争」
- 「ちょうど一種の低気圧と同じ現象が開化の中に起こって」等
- (3) 内発的開化／外発的開化について

- 「地道にのそりのそりと歩くのでなくって、やつと気合をかけてはびよいびよいととんでゆく」等
- (4) 外発的な開化が与える心理的な影響について
- 「たとえてみれば、あなた方という多数数の団体が、今ここで私の講演を聴いておいでになる。」等
- (5) 漱石の出した結論について

「涙をのんで上滑りに滑っていかねければならぬいい」

「滑るまいと思つてふんばるために神経衰弱になるとすれば、どうも日本人は気の毒と言わんか哀れ

み、自分の考えがどのように広がったり、深まったりしたりしたかを付箋に書き込み、用紙に貼り付ける。

課題作文例(抜粋)

○漱石は「神経衰弱にならない程度に上滑りに滑っていくしかない」と言っているが、これも彼なりのユーモア、皮肉なのかなと思った。『こころ』は新しい時代の若者へのメッセージだったと考え、漱石は本当は変化に立ち向かってしっかりと生きていかなければならないと訴えたかったと思う。しかし、そんなことを真面目に考えるのがばかばかしくなるほど、開化のスピードが速かったのかもしれない。

○漱石は英国への留学経験もあり、開化がどこへ向かうのかわかっていたかもしれないが、一般人には全くわからなかっただろう。そう考えると、私たちがおかれている現状も似ていると思った。日本がこれからどうなっていくのか少し不安になった。漱石が講演の最後に、「生真面目の意見であるという点に御同情になって」と言っていたが、漱石はユーモアでごまかしたが、かなり真剣に講演をしていたのではないかと思った。

と言わんか」等

平素から現代文の授業にペア学習を取り入れているが、概ね次のサイクルで行っている。

- ① 本文を読み、読み取った内容をノートに整理する。
- ② ペアにノートを見せながら自分の読み取った内容を説明する。
- ③ ペアの説明を踏まえ、自分のノートに加筆したり、誤っていた箇所は修正したりする。
- ④ クラス全体に発表する。
- ⑤ 必要に応じて教師が補足説明をする。

第7時

まず、『現代日本の開化』を読んで考えたことという題で各自が課題作文を書いた。その後、四人グループを作り、以下の手順で意見交換を行い、自分の考えを深めた。

- ① メンバーの作文を読み、それに対する感想や意見を書き込み、用紙に貼り付ける。これを三回繰り返す。

- ② 自分以外のメンバー三人分の感想や意見を読

【評価について】

本実践の評価は定期試験により行った。新しい傾向の問いとして、本文以外の資料(文明開化の場面を示す絵)を示して、本文の内容を説明させる問題を出题した。

評価について、現時点の考えでは、「課題作文」という形で生徒たちの学習を評価するのが効果的だろうと考えている。時に感想文であったり、時にテーマを与えた小論文であったりと、様々な形が考えられるが、思考を深化させるためには学習のまとめとして「書くこと」が不可欠なのではないかと思う。

■実践を終えて

「現代日本の開化」を『こころ』の関連教材として取り上げることで、難解な文章でも生徒は意欲的に読んだ。また、関連教材を読み進めることで筆者との対話が起きたものになっていくように感じた。

「夢十夜」全夜を読む——象徴的表現を解説する

ひろせみつる
廣瀬充
東京学芸大学附属国際中等教育学校

■作品を丸ごと読むという経験

日本の国語の授業では、ある程度長い作品は、その全体ではなく、抜粋されたものを教材として使用する。それは教科書という媒体や四〇人を対象とした一斉授業という授業形態にとって、限られた長さの方が都合が良いという理由によるものだろう。一つの教材が長くなればなるほど、他の教材を扱う時間的余裕はなくなってしまう。その意味では、作品の読みどころを短く区切って、その分さまざまな教材に触れるという方法は、効率的で理に適っている。

しかし、文学というものの特質を考えた場合、それは果たして適切だといえるだろうか。作品を抜粋するという行為には、それ自体に抜粋する者の解釈が入り込んでしまう。そのため、切り取られた作品を読むことは、初めから「解釈されたもの」を読むことと等しい。それをいつまでも続けていては、生

徒は作品世界を自分自身の力で創り上げていくことを厭うようになってしまふのではないか。生涯に亘って文学に触れ、親しむ態度を育てるためにも、文庫本を片手に一緒に読んでいく、そんな授業ができないか。そのような思いから今回の実践へと至った。

「夢十夜」は一つ一つの物語が独立しながらも、「こんな夢を見た。」という特徴的な書き出しを中心に関連性を見出すこともできる。教科書には二つ程度の物語が抜粋されているのが一般的だが、本実践では全十夜を扱い、「夢十夜」を全体で一つのテクストとして解釈させることを試みた。

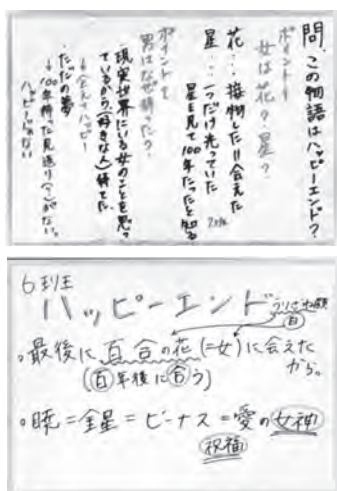
なお、本校は国際バカロレアのディプロマ・プログラム（以下DP）を導入しているが、そこでは、基本的に作品を一冊丸々読むこととなっている。本実践は、そうしたDPへの接続も意識した実践であることをお断りしておく。

■「第一夜」の読解（第1・2時）

本実践は高校一年の全四クラスを対象として行った。実施時期は二〇一七年の一月から二月にかけてである。事前に冬休みの課題として、「夢十夜」の全文を読み、好きな物語を選んでくるよう指示をした。授業ではまず「第一夜」について、この物語が夢の中の出来事であることを確認し、ペアで音読しながら夢らしい表現や矛盾する表現、象徴的な表現を抜き出す作業をさせた。並行して、漱石や作品の文学史的な情報を見つけた表現は、例えば、次のような点である。

- ・真つ白な頬と温かい血の色、唇の色はむろん赤い
- ・とうてい死にそうには見えないと確かにこれは死ぬなと思った
- ・死にますとも、と言いながら、女はぼつちりと目を開けた
- ・黒い目を眠そうにみはったまま
- ・そこに、写つてゐるじやありませんか
- ・大きな真珠貝／・天から落ちて来る星の破片／・月の光
- ・唐紅の天道（赤い日）／・青い茎／・真つ白な百合
- ・はるかのうから落ちる露／・暁の星／・百年待った

これらの表現が意味しているものを考えながら、この物語がハッピー・エンドなのか、バッド・エンドなのか、主題は何かを議論させた。「女は百合になったのか」「男は再会できたのか」などの争点を中心としつつ、様々な意見が出た。授業者自身の見解も紹介しながら、最後は各自の読みをまとめさせた。



グループワークに用いたボード

■「第六夜」の読解（第3・4時）

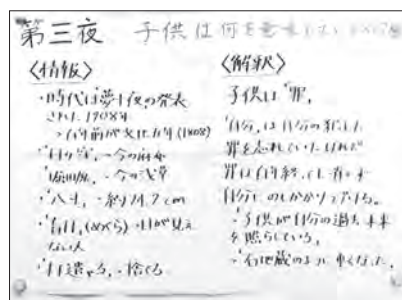
次に、「第六夜」の読解を行った。ここでは時代背景から物語を読み解くことを重視した。

この物語の時代設定が明治であるにもかかわらず、鎌倉時代の運慶が登場している不思議さを確認した後、登場人物がそれぞれどのような人物として描かれているかを考えさせた。外からあれやこれやと評価をする「無教育」な見物人と、それを一切気

にせず仁王を彫り続ける運慶という対比や、運慶の技量を批評する若い男とそれに「自分」が感化される点などには気づくことができたようである。

その後、なぜそのように描かれているかを考えるために、資料として「現代日本の開化」を読ませた。現代（明治）の日本の開化が外発的であり、それによって自己本位の能力が失われたという漱石の主張をふまえた上で、改めて「第六夜」のそれぞれの人物像について議論させた。明治に生きる見物人が、自己本位を体現する運慶の価値を理解できない人物として描かれていることに関しては概ね意見が一致したが、特に問題となったのは、「自分」をどのような人物として理解すべきかという点である。明治の人間でありながら比較的本質を見極めることができていると肯定的に捉える生徒もいれば、若い男の評価を無批判に受け入れているという点で「自分」はむしろ皮相な人間ではないかと考える生徒もいた。それらの議論をふまえ、最後は「ついに明治の木にはとうてい仁王は埋まっていけないものだ」と悟った。それで運慶が今日まで生きている理由もほぼわかった。」という末尾が何を象徴しているかを記述させ、まとめとした。

- ③全体でデイスカッション(担当班は司会板書、ノート記録)
④担当班の説明・まとめ



準備や発表に用いた模造紙

どの班の発表も積極的に議論が行われた。それぞれの意見を細かく紹介することはできないが、「第六夜」の読解の影響を受けて、西洋近代批判の文脈で捉える向きが多かったように思われる。特に「第七夜」と「第八夜」は、西に向かう船や、自転車と人力車の衝突などの小道具にそのような象徴的な意味を読み取りやすかったようである。後半になるにつれて、漱石の日本の近代化に対する問題意識が浮き彫りになると結論づける班もあった。

■「夢十夜」論の記述(第11時)

最終課題として「夢十夜」論を記述することを事前に予告しており、授業内でその時間を一時間とつ

■発表準備／発表・議論(第5～10時)

本単元での山場は、「第一夜」と「第六夜」以外の八つの物語について、分担して分析・解釈をし、発表する部分である。担当する物語は、基本的に好きなものを選ばせた後、人数調整をして決定した。分析にあたっては、次の点に注目するように伝えた。

- ①表現に着目する(「何が」「どのように」描かれているか)
・助詞・助動詞、文末表現、強調表現
・象徴・比喩的な表現
・対比／・ストーリー(順序)／・設定(時・場・人)
②それらの表現の意味を考える
③いろいろな表現を結びつけて、文章全体として何を表しているのかを考える
・作者の経験／・時代背景／・ある枠組みから見ると

まずはグループ内で音読し、気になる表現を挙げるところから始めるよう、指示をした。生徒が各々の文庫本に書き込んだり、印を付けたりしながら熱心に読んでいた姿が印象に残っている。模造紙やマジック、付箋なども適宜使えるようにし、発表に備えさせた。

発表の流れは以下の通りである。

- ①クラス全体に問いを投げかける
②班ごとにデイスカッション(担当班は発表準備と議論の観察)

た。「二つ以上の物語について言及すること」を条件とし、評価ルーブリックも提示している。また、伊藤整、荒正人、江藤淳、柄谷行人、吉本隆明らの先行論文を抜粋したものを参考資料として配布した。生徒は、それまでの資料や議論したことを振り返りながら、めいめいの論を深めることができていた。

■まとめ

本実践を通して考えさせられたのは、「夢十夜」の教材としての価値についてである。「夢」という形をとるこの作品は、一見不可解な物語が展開され、場合によっては「何のために読むかわからない」と感じる生徒も少なくないように思う。しかし今回実践をしてみて、そのような謎を「解説」していくことを好む生徒も多く存在することがわかった。文学を解釈する面白さを味わわせるには、「夢十夜」は恰好の教材といえるのではないか。

現在、対象生徒のうち、DPに進んだ生徒たちを受けもっている。「夢十夜」で培った象徴的な表現を意味づけたり、時代背景と結びつけたりする力は、文学解釈において非常に重要であると感じている。今後、より魅力的な教材・活動の開発に努めたい。

「開化」は文化である——「現代日本の開化」

いしはら ちあき
石原千秋
早稲田大学教授

「開化」から降りるとは言っていない

漱石は言う。「西洋の開化（すなわち一般の開化）は内発的であって、日本の現代の開化は外発的である」「現代日本の開化は皮相上滑りの開化である」と。「現代日本の開化」のさわり、もつとも有名な一節だろう。

現代日本の開化がなぜ外発的で上滑りなのかと言えば、漱石はお得意の意識の推移を比喩的に用いて説明する。意識はAからBへ、BからCへと順次推移していく。しかし、現代日本の開化は江戸時代の鎖国のために、Bが抜け落ちてAから突然Cに飛び移ったようなものである。それを取り戻すために、神経衰弱（当時のやはり病というか、はやり言葉だ）になるほど、生存競争において無理を強いられると言うのだ。

そこで、私たちは「西洋への追従は止めて、日本古来の文化を大切にしよう」などとまるで国粹主義

者になったかのようなことを思ってしまう。この後半はいいとして、前半は鎖国主義、いまはやりの言い方をするなら、自国第一主義でしかない。それは、漱石が言ったこういう一節を忘れてしまうからだ。「しかしそれが悪いからお止しなさいというのではない。事実やむをえない、涙を吞んで上滑りに滑って行かなければならないのです」と。漱石は「開化から降りよう」などという非現実的なことを言っているわけではないのだ。漱石は処方箋は思いつかないと言うが、いまなら「開化は開化で乗り越えるしかない」と言っていると思う。

ここで、やはり教科書教材となっていた「私の個人主義」に触れておこう。

「私の個人主義」は、英文学研究とは何かがわからなくなった漱石が、「西洋人」に振り回されるのではなく、「自己本位」の立場を手にしたという物語（？）としてよく知られている。だから、高校の

国語教科書にも収録されている。「主体的になりなさい」とか、「自分の頭で考えなさい」といった教訓として教えられてきたはずだ。少し前に話題になった茨木のり子の詩集『寄りかからず』（筑摩書房、一九九九・一〇）のタイトルともなった詩「寄りかからず」もおそらくこいう「教訓」の延長線上で読まれたに違いない。

「もはや できあいの思想には寄りかかりたくない／もはや できあいの宗教には寄りかかりたくない／もはや できあいの学問には寄りかかりたくない／もはや いかなる権威にも寄りかかりたくはない」この決然とした調子が、多くの現代人の心を捉えた。しかし、注意してほしい。このリフレインは、「寄りかからない」ではなく「寄りかかりたくない」なのだ。それが不可能だとわかっているから、「寄りかかりたくない」と詠んだのである。ここに、単純な保守主義とは違った、この詩人の知性がある。日本語で詩を書く以上、詩人は「日本語という思想」から逃れることはできない。言葉の芸術家である詩人は、それを知り抜いているからこそ「寄りかかりたくない」としか書けなかったのだ。

漱石の「自己本位」も同じだった。自分勝手な研

究を始めたのではなく、「文芸とはまったく縁のない書物を読み始め」たのである。言うまでもなく、それらはイギリスで買ったもので、英語で書かれた「書物」だった。ただ、「文芸」に関する本ではなかっただけだ。イギリスにないものを探して、イギリスの学問に学んだのである。もし「自己本位」という言葉が使えるなら、この点に関してである。決して自分勝手でもなければ、自己中心的でもない。

やや大袈裟に言えば、それは時代の必然でもあった。漱石がイギリスに留学した時代は、まだ英文学科自体が世界の大学にほとんどなかった。なぜならイギリスの中産階級にとっては、漱石が学びたかったイギリスの現代文学はわざわざ大学で学ばなくても「わかる」からである。英文学を学ぶのは、イギリスを目標とする「遅れた地方や国」である。たとえば、スコットランドやインドだった。東京帝国大学に英文学科が設置されたのは、世界でもごく早い時期だったのである。それは富国強兵の一環だった。だから、英文学自体が学問として確立していなかった。だから、漱石には「自己本位」の道しかあり得なかったのだ。

こうした事情を知らないと、「現代日本の開化」

をも読み誤ることになる。漱石は保守的なことは言っていない。たとえ「外発的」であつても、どれだけ辛くてもやらざるを得ないと言っているのである。それが、漱石の生きた時代の要請だった。いまおそくすべての国や地域が、人類が自ら開発したテクノロジによって「外発的」な「開化」を強いられている。人類が自己疎外を招いたと言わなければならないか。だから、この事態は「内発的」というような立場で解決できるようなものではない。テクノロジを制御するテクノロジをテクノロジそれ自身に組み込むとができるかどうかにかかっているはずだ。「内発的」という言葉を内向きに捉えたのでは、「現代日本の開化」の教訓は生きない。

「開化」の二つの形

漱石は開化（近代化と言つていいはずだ）には二種類あるという。

一つは「消極的のもの」で、時間だのエネルギーだのを節約するための開化である。極論すれば、近代は情報をも含めた「できるだけ多くのものを、できるだけ早く、できるだけ遠く」を目標にしてきた。そのために何が節約できるかを形にするのがテクノ

ロジで、便利さを求める近代化の根本を支えている。その極点がナチスのガス室であり、水爆である。できるだけ多くの人をできるだけ素早く殺す……。戦争が科学技術をもつとも発展させたのは、まぎれもない事実である。だから、古代から大帝國を形成して比較的平和だった中国は「遅れ」て、多くの諸侯の間で争いが絶えなかったヨーロッパが「進んだ」のだ。鎖国時代の日本も、「平和」だったから「遅れ」たのである。

もう一つは「積極的のもの」で、たとえば学問を含めた「道楽」のようなものだと言ふ。これは「道楽」だが、この二つの開化は複雑に絡み合っているとも言っている。それはそれで、「道楽」から来る科学的思索が近代科学を発展させ、哲学的思索が人を管理する理論を生み出すのだから。フーコーが見ぬいたように、「知は力」なのである。当代最高の教育を受けた漱石文学の主人公たちが「知」を浪費しているのは、それは「知」が「力」になるのを避けるためではなかったか。漱石はそれ以外に答えを出せなかったのではなかったか。

私たちは、どうすれば「開化」を飼い慣らせるのだろうか。

科学と文化

かつてコンニャクゼリーが開発されて、子供が喜んで食べた。ところが、これをのどに詰まらせて死亡する事故が起きた。コンニャクゼリーの事故は毎年二件あるかないでレアケースだったのだが、大きな問題となった。お餅の死亡事故は毎年百件以上もある。コンニャクゼリーの比ではない。しかし、毎年これだけの死亡事故が起きていながら、お餅を改良しようという議論は起きない。理由は、お餅は文化だがコンニャクゼリーは文化になっていなかったからだろう。自動車事故では毎年四千人以上の死者がでる。これは経済効果もさることながら、便利という名の文化になっているから、車を廃止しようという議論は大きくならないのだろう。文化ほど平気で人を殺すものはない。かつて自民党は、臓器移植促進のためにいわゆる「脳死法案」を国会に提出した。しかし採決に当たっては、個人の死生観に関わる問題だとして、党議拘束をかけなかった。実際、自民党からも反対票がでた。政治が医学の問題を文化にゆだねた瞬間だった。

もちろん、文化は不変ではない。テクノロジによって変質しながら生き延びることもある。写真は

デジタル技術によってフィルムを使わなくなっても写真である。時間厳守の文化を広めたのは、鉄道というテクノロジである。文化をあまりに固定的にしてしまうと、民族問題を激烈に引き起こす。人々の共感が得られる限り、時代につれて文化はゆるやかに変化してもいい。

世界の形を決めているのは文化である。テクノロジは、人の望むことなら何でもかなえてくれる。あるロボット研究者が言っていた。「もうすぐ、人のできることでならすべてロボットができる時代が来る。では人が生まれて、やりたいことをすべてロボットに任せて、ベビーベッドに寝たまま寿命を全うするのが人間らしい生き方と言えるのか」と。これが「消極的開化」の極地である。そこには、もう「人間」はいない。彼にして悩みは深いようだった。

テクノロジは自動作用があるかのように進歩する。それを止めることができるのは文化しかない。どこまで進歩させるかを決めるのも文化しかない。国語教育の中の文学の縮小は止まりそうもないが、それは私たちが世界の形を決めることができなくなることを意味する。私はただこのゆえに文学の縮小に反対する。ただこのゆえに文学に期待する。

特集●夏目漱石生誕一五〇年

最新 授業に役立つ漱石関連本二〇冊

文責II編集部



二〇一六年は漱石没後一〇〇年、二〇一七年は漱石生誕一五〇年。

漱石イヤーとでも呼ぶべき二年を記念して、漱石に関する書籍などがここ数年で多く世に出ました。

その中から、授業の参考となるもの、高校生に薦めたいもの、二〇冊を四つのテーマ別にご紹介します。

夏目漱石入門書

姜尚中『姜尚中と読む 夏目漱石』

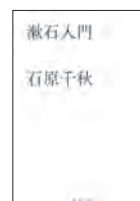
(岩波ジュニア新書 二〇六・一)



政治学者である姜尚中が、『吾輩は猫である』や『こころ』など多数の作品から、漱石の考え方や人物像をやさしく解説。

石原千秋『漱石入門』

(河出文庫 二〇六・二)



漱石のさまざまな作品を「家族関係」や「ジェンダー」などの視点から解説。小誌連載にも繋がる内容で、読解の参考になる。

小森陽一『13歳からの夏目漱石―生誕百五十年、その時代と作品』(かもがわ出版 二〇二・三)



漱石作品を時代背景と照らし合わせて読み解く、中高生向け講義をまとめた本。生徒が読んでも、授業の参考にもオススメ。

香日ゆら『夏目漱石解体全書』

(河出書房新社 二〇二・五)



漫画やイラストで、夏目漱石や周囲の人を紹介する本。「文豪夏目漱石」も普通の人のなかにも、と親しみを持つことができる。

夏目漱石に興味をもつ

関川夏央、谷口ジロー『新装版 坊っちゃん時代』

(双葉社 二〇四・六・一〇 全五部)



史実と虚構を織り交ぜながら、漱石を中心に激動の明治を生きた人々の姿を描く。手塚治虫文化賞を受賞した名作。

近藤ようこ『夢十夜』

(岩波書店 二〇二・二)



折口信夫、坂口安吾作品を漫画化してきた作者が、珠玉の短編を手がけた。白と黒のコントラストで、世界観を見事に表現。

二宮和也(出演)、鈴木雅之(監督)『坊っちゃん』

(フジテレビ 二〇二・二・三)

DVD & Blu-ray

原作の軽快なテンポをそのままに映像化。豪華キャストで、現代に坊っちゃんをよみがえらせたドラマ。

近藤浩一路『漫画 坊っちゃん』

(岩波文庫 二〇二・二)



一九一八年に漫画化された『坊っちゃん』を復刻。右ページに本文の抜粋、左ページにイラストが付され、楽しく読める。

作家、夏目漱石を知る

村木晃『坊っちゃん』の通信簿―明治の学校・現代の学校』（大修館書店 二〇六・四）



『坊っちゃん』には、自らも教員だった漱石の現場感覚が息づいている。現代にも通じる教育問題をあぶり出す。

石崎等・中山繁信『夏目漱石博物館―絵で読む漱石の明治』（彰国社 二〇六・六）



漱石は東京などの都市を巧みに小説の中に描き込んだ。漱石が暮らした家や町、作品の舞台をイラスト化し、解説する。

小森陽一『子規と漱石―友情が育んだ写実の近代』（集英社新書 二〇六・二〇）



二〇一七年は正岡子規生誕一五〇年でもある。二人の文学者の友情を描きながら、「写生」概念の成立過程を解説した一冊。

大井田義彰『教師失格―夏目漱石教育論集』（東京学芸大学出版 二〇七・四）



近代教育の黎明期である明治、漱石は教壇に立っていた。漱石の教育に対する考えを知ることができるアンソロジー。

小森陽一、飯田祐子、五味淵典嗣、佐藤泉、佐藤裕子、野網摩利子編『漱石辞典』（翰林書房 二〇七・五）



二九八名の研究者が、七九七項目を執筆。漱石が触れた書籍や美術、漱石が用いた言葉から、その思考に迫る大著。

半藤一利『漱石先生がやって来た』（ちくま文庫 二〇七・六）



帝大教授か、小説家か。猫の目線からの小説とエッセイで、どちらの道に進むか迷う漱石の明治三八年を描く。

石原千秋編『夏目漱石「こころ」をどう読むか』（河出書房新社 二〇四・五）



東浩紀、大澤真幸、荻上チキらのエッセイ、山崎正和、石原千秋、小森陽一らの評論など、『こころ』論の精髓を一冊に凝縮。

今西幹一企画『坊っちゃん』事典』（勉誠出版 二〇四・一〇）



国民的名作のすべてがわかる総合事典。人名地名、作品世界、周辺事実、成立考、研究史、史跡、映画、観光資源などを網羅。

アンジェラ・ユー、小林幸夫、長尾直茂他編『世界から読む漱石「こころ」』（勉誠出版 二〇六・一）



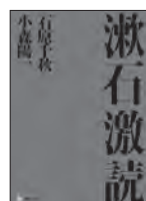
日本だけでなく世界でも読まれている『こころ』。国内外の研究者が、その仕組みやテキストの行間、受容史などを論じる。

奥泉光編『夏目漱石―百年後に逢いましょう』（河出書房新社 二〇六・六）



奥泉光責任編集の漱石ムック。ベストセレーション、人気作家による作品解説、対談、パロディ、資料など、盛りだくさん。

石原千秋、小森陽一『漱石激読』（河出書房新社 二〇七・四）



刺激的な漱石研究で一時代を築いた名コンビが、「文学論」を皮切りに、漱石の一四作品について徹底的に語り尽くす。

増田裕美子『漱石のヒロインたち―古典から読む』（新曜社 二〇七・六）



『それから』の三千代、『三四郎』の美禰子などの人物像の謎や、『こころ』の構造の特徴を、古典との関連から探る。

国際バカロレアと新学習指導要領

半田 淳子 はんだ あつこ

国際基督教大学教授。専門は日本近代文学、国語教育、日本語教育。近年は国際バカロレアの国語教育について関心をもち、講演会やワークショップなども開催している。

ここ数年、国際バカロレア機構（IBO）が提供する国際バカロレア（IB）のプログラムが、国内でも注目を集めている。IBOはスイスのジュネーブに本部を置く非営利教育財団で、ディプロマ資格プログラム（以下、DP）を修了し、最終試験において一定の基準を満たした者には国際社会で通用する大学入学資格、国際バカロレア資格（ディプロマ）を授与している。日本政府も、東京五輪が開催される二〇二〇年までに、IBプログラムを実施する国際バカロレア認定校（以下、IB認定校）の数を二〇〇校以上に増やすことを計画し、働きかけを行っている。

IBプログラムには、DPのほかにも、初等教育に相当するPYP（プライマリー・イヤーズ・プログラム）、中等教育に相当するMYP（ミドル・イヤーズ・プログラム）、職業教育に関連するCP（キャリア・リレイトッド・プロ

グラム）の三つのプログラムがある。現在、国内のIB認定校の数は四六校であるが、CPを除くいずれかのプログラムを単体で、あるいは複数、実施している。ちなみに、四六校のうちの二〇校が「学校教育法」第一条に規定されている一条校であり、残りはインターナショナル・スクールである。一条校の場合、文部科学省の学習指導要領と、IBOが各教科に関して発行している『指導の手引き』や『教師用参考資料』との整合性が不可欠である。特にDPの場合、六領域（グループ）（「言語と文学」「言語習得」「個人と社会」「理科」「数学」「芸術」）から各一科目ずつ合計六科目を選択し、そのうちの三科目から四科目を二四〇時間（上級レベル）で履修し、残りを一五〇時間（標準レベル）で履修することとなっている。加えて、「知の理論」「創造性・活動・奉仕」「課題論文」といった必修科目もある。

六領域のうち、国語教育に当たるのがグループ1の「言語と文学」であり、日本語を母語とする生徒は「言語A…文学」「言語A…言語と文学」「文学とパフォーマンス」のいずれかを選択（多くの場合、「言語A…文学」を上級レベルで選択）する。ちなみに、DPには「日本語B」もあり、こちらは外国語としての日本語教育を意味している。高等学校の国語科であれば、必修科目の「国語総合」の授業に加え、DPの「言語と文学」のための二四〇時間を確保しなければならず、IB認定校の多くが時間割の編成に苦慮している。

とはいえ、日本の教育とIB教育の目指す方向性が大きく異なっているわけではない。今年三月に公示された新学習指導要領には「探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする」（「総合的な学習の時間」「目標(1)」と記されているが、「探究的な学習」や「概念」の形成などはIB教育が重視している点でもある。特に、DPの前段階に当たるMYPでは、IBOが指定する「重要概念」と「関連概念」を中心に単元を構成し、探究的に学習を進めていくことが求められている。さらに、新学習指導要領では、生徒たちの「主体的・対話的で深い学び」の実現が盛り込まれているが、これはIBの教室活動でも推奨され、実践されているものである。

また、IB教育では、言語教育が非常に重視されている。それは、批判的な思考の育成には、言語の教育が中心的な役割を果たすと認識されているからである。さらに、DPの「言語と文学」は、その領域名からも明らかのように、言語教育であるとともに、徹底した文学教育でもある。ここでは、日本文学に限らず、翻訳文学も含め、小説、戯曲、詩歌、随筆など、さまざまなジャンルの作品を数冊選択し、徹底的に読み込んで分析し、論評する。指導する側の文学的な力量も問われるプログラムであるといえる。近い将来、IB認定校の数が二〇〇校にまで増えた場合、当然のことながら、このようなIBプログラムを教えることのできる教員の育成も重要な課題になってくるだろう。

こうした実情もふまえ、このたび、IBプログラムについて、その内容を国語科の先生方に向けて紹介する『国語教師のための国際バカロレア入門——授業づくりの視点と実践報告』を刊行することとなった。本書は、IB全般に関わることや、IBの国語教育の授業づくり、実践報告などを収録している。さらに、実際にIB教育を受けてきた大学生たちの声も紹介している。新学習指導要領の「探究的な学習」や「概念」の形成に関するヒントも満載である。IB認定校の先生のみならず、IB教育に関心のある方はじめ、すべての国語の先生方には是非一読していただきたいと願っている。

【新刊紹介】

国語教師のための国際バカロレア入門

授業づくりの視点と実践報告

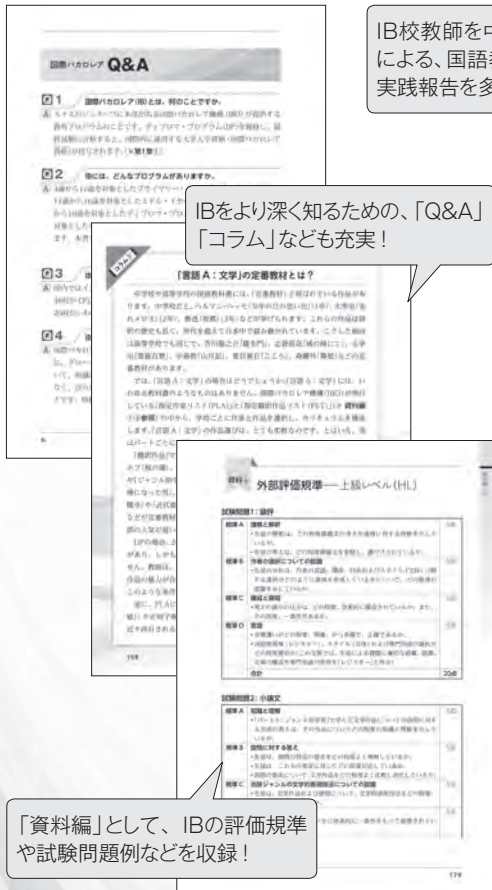
世界が注目する「IB」「国語」教育を徹底紹介
本邦初の国語教師向け入門書ついに刊行！



半田淳子 編著
A5判・並製・192p
定価 2,200 円＋税



IB校教師を中心とした執筆陣
による、国語教師目線の解説・
実践報告を多数掲載！



「資料編」として、IBの評価基準
や試験問題例などを収録！

追跡レポート 入試改革

「大学入学共通テスト」のモデル問題例

文責＝編集部

二〇一七年五月には記述式のモデル問題例、七月にはマーク式のモデル問題例が公表されました。今回は、問題例のうち、特に正答率の低かった二つをご紹介します。

「大学入試センター試験」（以下、センター試験）に替わる新しい選抜方法の名称が「大学入学共通テスト」（以下、共通テスト）に決定した。試験時間は一〇〇分で、記述式の大問が一つ増える分、センター試験よりも二〇分延びる。五月、七月にはモデル問題が公表され、共通テストの実像が次第に明らかになってきた。

記述式問題の出題範囲は古文、漢文を除いた「国語総合」で、五月に公開された問題例は二問であった。第一問は、街の景観保護のガイドラインと、父と姉の会話を読み、設問の条件に合わせて記述を行う問題。第二問は「駐車場使用契約書」を読み、設問の条件に合わせて記述を行う問題。どちらも「実用的な文章」の範囲からの出題である。

また、七月に公開された問題例によると、マーク式問題は、解答の形式をセンター試験から引き継いでいるものの、出題形式は大きく異なりそうだ。第一問は短歌につい

ての二つの評論、二人の生徒の会話から、読み取ったことを選択する問題。第二問は『平家物語』『忠度都落』と二人の人物の対談から、読み取ったことを選択する問題であった。

文章の内容を正確に読み取るという能力が評価されてきたセンター試験と打って変わって、共通テストは記述式、マーク式問題ともに、「特に『論理（情報と情報の関係性）の吟味・構築』や『情報を編集して文章にまとめること』に関わる能力の評価を重視する」ということがよくわかる。ただし、五月、七月に公開された問題例はそれぞれ独立したもので、まだ共通テストの全貌を示すものではなかった。一一月の試行調査（プレテスト）は一〇〇分の試験時間で、記述式とマーク式問題がそれぞれ出題されるようだ。高校二年生以上を対象として、約六万八〇〇〇人が受験するこのテストの調査結果に、注目が集まる。

〈記述式モデル問題例1〉

かおるさんの家は、【資料A】の「城見市街並み保存地区」に面している、伝統的な外観を保った建物である。城見市が作成した景観保護に関する【資料B】「城見市『街並み保存地区』景観保護ガイドラインのあらまし」と、かおるさんの父と姉の会話を読み、後の問い（問1～4）に答えよ。

【資料B】

城見市「街並み保存地区」景観保護ガイドラインのあらまし

ガイドラインの基本的な考え方

城見市「街並み保存地区」は、市名の由来にもなっている秋葉山山頂に臨まれた白鳥城下を通る、旧街道の伝統的な道路遺構と街並みからなります。その街並みと自然とが呼応し、そこに集まる人々によって文化と共に育まれてきたところにその特徴があります。

私達は、「街並み保存地区」に限らず、城見市が育んできた歴史、文化の特質を尊重し、優れた自然と景観に対して十分配慮するとともに、この自然と景観を維持、保全、育成しなければなりません。そのためには、住民、企業、行政など全ての人が城見市の景観に対するさらなる意識の向上を図り、貴重な財産であることを深く認識し、この美しい景観を将来の世代に引き継ぐ責務を負っているのです。

景観保護の目標

ア 市役所周辺から商店街にかけてのにぎわいを連続させるとともに、都市の顔として風格のある空間づくりを進めます。

イ 秋葉山の眺望や松並木などの景観資源を活用し、親しみがあり愛着と魅力を感じる街並みを形成していきます。

ウ 広域からの来客のある、観光や伝統行事などの拠点にふさわしい景観づくりを進めます。

景観保護の方針

- ・松並木及び「街並み保存地区」の植栽を保全し、街並みや秋葉山の景観との調和を図ります。
- ・建築物の壁面、広告物や看板の色彩については、原色などの目立つものを避け、伝統的建築物との調和を図ります。
- ・個人住宅を含めて、建物外面の色調を落ち着いたものとし、壁面の位置や軒高をそろえます。一級及び観光客用の駐車場や街路のごみ箱、ごみ収集時のごみ置き場は目立たないように工夫します。
- ・「街並み保存地区」は自動車への出入りを制限し、ゆとりある歩行空間を確保します。
- ・議会等との協議を通して、景観を保護するために必要な予算があれば、その計上を検討していきます。



【かおるさんの父と姉の会話】

姉「略」……ところでお父さんは、このガイドラインの導入について、どう思っているの？」

父「私は反対だよ。住民の負担が大きすぎるね。外壁の塗装も建物の改築も、すべて周辺の景観に配慮した上で、適切な対応を自己負担で考えなければいけない。これじゃあ、引越した方が気が楽だ。かえって空き家を増やすだけだと思うよ。」

姉「でも、今のままだと、ここはどんどん衰退していくだけだね？ 住民がいなくなると、この街の文化や歴史の一部が途絶えてしまうよね。この辺って、道路も狭いし、家も古いけど、この街並み、私は結構好きだな。だから、マイナスティンメントだと思ってるけど、逆にこの街の魅力にしたって、観光客にPRすることもできるんじゃないかな。街並みを整備して、地域の魅力づくりに成功したら、ここから出て行く人が少なくなつて、空き家も減るよ。そうしたら、この街は守られるよね。」

父「それは希望的な推測だし、感情論に過ぎないね。実際問題として、ガイドライ

ンの通り、古い街並みを残すとしたら、家を改築する時に、デザイン料にせよ材料費にせよ、通常以上の自己負担が必要になる。これじゃ、地域住民の同意は得られないよ。」

姉「私は、ある程度の住民の自己負担は必要だと思う。こういう地域づくりって、行政に任せっぱなしにしたままで、私たち地域住民は受け身でいていいのかな。それに、ガイドラインには広告や看板の色彩のことも書いてあるけど、これからは、自然環境も含めて、そうした住環境も大事にしないとけないと思うの。確かに色々と制約があるし、お金もかかるけど、『地域を守り、地域の魅力を作っていくのは、他でもない私たち自身なんだ』っていう意識を持って、私たちの生まれ育ったこの街を守っていくためには、ある程度の自己負担も必要だよ。」

※問1・2・4は省略

問3 会話文から読み取ることができ、父と姉の「景観保護ガイドライン」の導入についての議論の対立点を、「〳〵の是非。」という文末で終わるように二〇字以内で述べよ。

【問3の正答例】

個人の自由を制限し、自己負担を求めること（の是非。）(20字)

自己負担や制限を受け入れて進めること（の是非。）(18字)《正答率30.0%》
(正答の条件)

- ①20字以内で書いているもの
- ②文末表現が「の是非。」に接続できるもの
- ③「個人の自由の制限・制約を求めること(または受け入れること)」に触れているもの
- ④「自己負担を求めること(または受け入れること)」に触れているもの

【出題のねらい】

テキスト全体の内容について、異なる立場の意見に着目し、対比されている事項を考察し、その論点を整理して書く問題である。

〈マークシート式モデル問題例2〉

次の【文章Ⅰ】は『平家物語』『忠度都落』である。【文章Ⅱ】は、【文章Ⅰ】を読んだふたりの人物による対談の一部である。これらを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。なお、【文章Ⅰ】に登場する薩摩守忠度は平家一門の武将で、平忠盛の六男、平清盛の異母弟にあたる。忠度は歌人・藤原俊成に歌を師事していた。

※【文章Ⅰ・Ⅱ】、問1～4・6は省略

問5 【文章Ⅱ】の傍線部B「文武両道に秀でた堂々たる人物」とあるが、【文章Ⅰ】において、俊成が忠度の人となりを語った一文として、本文に□で示した次の箇所が挙げられる。ここから読み取れる忠度の人物像として適当な内容を、【文章Ⅰ】に即して、後の選択肢①～⑦のうちから全て選べ。

さても唯今の御渡りこそ、情けもすぐれて深う、あはれもことに思ひ知られて感涙抑へがたう候へ

- ① 戦に敗れ前途がない状況でも、危険を冒してまで京に戻るほどの強い意志を持った人物
- ② 戦の最中であっても、師に教えを請うためには遠路をものもしない探究心の旺盛な人物
- ③ 今や敵となった相手にも、願いをかなえるためには直ちに会いに行く熱意のある人物
- ④ 自作の何首かは勅撰集に採られるものと信じて疑わない、和歌への自負心の強い人物
- ⑤ 可能性は低いが自分の和歌を託して後世に残そうとした、和歌への思いに満ちた人物
- ⑥ 死ぬと分かっているながらも、帝にどこまでも付き従おうとする忠誠心にあふれる人物
- ⑦ 目標としてきた師に、最期に武士としての矜持を認めてほしいと願う誇り高い人物

【問5の正答例】

①、⑤（正答の番号を過不足無くマークしているもののみ正答）《正答率2.5%》

【出題のねらい】

複数のテキストを読んだ上で、文章に描かれた人物について読み取る問題である。

参考 URL

◆高大接続改革の実施方針等の策定について

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/07/1388131.htm

◆モデル問題例及びモニター調査の結果等

http://www.dnc.ac.jp/corporation/daigakunyugakubousyagakuryokuhyoka_test/model.html

◆平成 29・30 年度試行調査（プレテスト）

http://www.dnc.ac.jp/corporation/daigakunyugakubousyagakuryokuhyoka_test/pre-test.html



Q 「実用的な文章」を授業でどう扱うか？

センター試験に替わる新しいテストでは、「実用的な文章」を読む力も求められるようですが、現代文の授業では、評論や小説などばかりで、あまり「実用的な文章」を読む機会がありません。生徒に取り組ませてみたいと思うのですが、どのような文章を使って授業を行うとよいでしょうか。

神奈川県・30歳

A 山下直

やました なおし

文教大学教育学部准教授

平成二〇年版学習指導要領の国語総合「C読むこと」の言語活動例ウの解説に、「実用的な文章」の例として「報道や広報の文章、案内、紹介、連絡、依頼などの文章や手紙のほか、会議や裁判などの記録、報告書、説明書、企画書、提案書などの実務的な文章、法律の条文、キャッチフレーズ、

宣伝の文章、インターネット上の様々な文章や電子メール」が挙げられています。これらはいずれも生徒が日常生活で目にするものばかりです。したがって、これらの文章を教材として用いる際には、生徒たちがこれらの文章を活用する場面を具体的に思い浮かべることが大切です。そうすれば、生徒たちにとどのような力を身に付けさせるべきかが自ずとわかってくるはずです。評論や小説を読ませる授業では、教材の内容を理解させ、それをもとに生徒一人一人

人が考えを深めたり、表現の効果を味わったりできるようにすることを目指すことが多いでしょう。しかしながら、例えば報道や広告の文章や案内、紹介、連絡、依頼などは情報を正確に読み取ることが大切であり、企画書や提案書では企画や提案の趣旨を読み誤ってはいけません。一八歳選挙権のことを考えると法律の条文にも読み慣れさせたいですね。もちろん、読み取るだけでなく表現の効果を評価したり、実用的な文章を書いてみたりすることも重要です。

次期学習指導要領では高等学校の科目編成が大きく変わります。必修科目の一つである「現代の国語」は「実社会、実生活に生きて働く国語の能力を育成する科目」と位置づけられています。また平成三二年から大学入試センターテストに替わって導入される新テストにも実用的な文章の採用が検討されています。これからは、実用的な文章を積極的に取り入れていくことが求められています。

このコーナーでは、国語科にまつわる疑問・質問に、大修館の教科書編集委員が親身にお答えしていきます。質問は小社「国語教室Q&A係」まで。

『伊勢物語』第一段と『源氏物語』

田口 和夫
たぐち かずお
文科大学名誉教授

「うひかうぶり」と「いちはやきみやび」

■はじめに

「昔、男、初冠^{うひかうぶり}して、奈良の京」で始まり、「昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける」で終わる第一段は、『伊勢物語』の中でも、教科書に採られることが多く、「筒井簡」の第二十三段とならんで、よく知られた段である。したがって、その解釈は安定し、何の問題もないように思っていた。ところが、第一段の「いちはやき」についての研究発表を聞く機会があり、あらためて考えてみたところ、「うひかうぶり」と「いちはやき」を関連付けて解釈すべきであるという結論に至った。このことを報告し、批正を乞いたいと思う。

「いちはやき」についての知見は、私も会員である説話

のような意味に解すべき（後略）

築島氏のこの説は、私が学生時代にはじめて通読したテキスト、日本古典文学大系『竹取物語 伊勢物語 大和物語』（昭32）の補注でも、

「いち」は「いちじるし」の「いち」と同じく、「いた」「いと」と同語源で、「甚だしく」の意、また「はやし」は「烈しい」の意と見るのである。従って「いちはやし」は「非常に烈しい」の意となる。

と述べられている。学部学生時代の私は大系の説に異を唱える力もなく、この「男」の行動はそんなに烈しいのかなと思いつつ、今日に至っていた。

■「いちはやき」の解釈

大修館の古典教科書（『新編古典B』など）でも「いちはやき」には「激しい。情熱的な。」という注を付け、「いちはやきみやび」には、指導資料で「情熱的な風雅なふるまい」という口語訳を付けている。そして「男」のどのような行動をさして言っているか」という設問には、同じく指導資料で「美しい『女はらから』に心を奪われるや、すぐさま自分の着ていた狩衣の裾を切って、そこに衣の模様をふまえた恋歌を書きつけて贈ったこと」と答えている。これは現在の『伊勢物語』研究の状況を反映した標準的な

研究会会員の南ちよみ氏が、二〇一七年五月の中古文学会で発表するために、あらかじめ説話研究会で予備発表されたときに得られた。南氏は真名本『伊勢物語』を研究対象に取り上げられており、今回の発表も「真名伊勢物語」初段の『壹早』というテーマで行われた。そこで南氏は「いちはやき」について、江戸以前の古注と明治以降の注釈書の説を網羅して紹介された。その中で、築島裕氏「伊勢物語の解釈と文法上の問題点」（講座『解釈と文法4』明治書院、昭35）に見える、次の説を引く。

「すばやい」または「てつとり早い」の意としている説があるが、私はこの語は speedy という、時間的な速度を示す語ではなくて、程度がはげしい、熱烈だ、

解釈と言ってよいだろう。

南氏は真名本の「壹早」が意を得ている表記のだと主張される。漢字の字義から言えば「たいそう早い」と解し得るであろう。古注の類では、「すぐれてはやしとかきたるは、せちなること」（島原文庫本『和歌知頭集』）とか、「すぐれてすみやかなる心也。これによりて人の性の急におもひのどめぬ」（『伊勢物語愚見抄』）と言うように、「はやい（早卒）・すみやか」の意とし、そこから「そうしたい」という切迫した思い」を読み取っている。真名本「壹早」はこういう解釈と共通の理解の下にあると言つてよいであろう。契沖の『勢語臆断』は、初め「すみやかなる心也」とし、それを「はなはたしき」と訂正している。時間の問題から程度へと解釈が変遷したようで、このあたりが現在普通になっている解釈の先蹤と思われる。

「早い」「甚だしい」いずれも、贈る歌を書くために「狩衣の裾を切」ったという「男」の行動に焦点を合わせての解釈であることは共通している。古注の『和歌知頭集』がこの行為について、「さばかりの人の野にありくとも、すみふでもつほどにて、などは紙もたせではあるべき」と言い、「されど、こころのみだれたるを、このしのぶずりのみだれたるにたとへて、哥によまんとて、これにはかきたる也」（書陵部本）と説明しているのは、読み進めてい

った時に出る当然の疑問に答えたものだが、相当に合理的な説明だった。これは現代ではあまり問題にされていない見解ではあるけれども、「紙を持たないのではない」、「信夫の乱れ」の歌を詠もうとしたから、狩衣を用いたのだ」という解釈は面白い。ここから後の行文が無理なく自然に理解できるからである。「男」は自分の着ていた信夫摺りの狩衣と「みちのくの」の歌との関連をはじめから承知して「春日野の」の歌を詠み、その仕上げとして「狩衣の裾を切」って書き付けたことになる。こう解釈すると、「男」の行為は知的作業をともなっており、「早くみことだ」とは言えるけれども、感情にまかせて「烈しい」行為をしたとは言えないだろう。このように考えると「いちはやきみやび」は「たいそう早いみやび」と解することになるが、私は「いちはやき」には、『伊勢物語』冒頭段として、「狩衣の裾を切」るだけではないもう一つの意味が重ねられていたと考える。それは「うひかうぶり」と限定されていることに関係している。

■『源氏物語』から

「うひかうぶり（初冠）」を「元服」の意とする解釈は、ほとんどの諸注が説くところである。辞書的にはもう一つ「はじめて位に叙せられ、任官すること」（岩波古語辞典）

とともに王族であることが、その想定を補強するし、それ以上に、『伊勢物語』も『源氏物語』も主人公の一代記の出発点を明示する初めの巻に、この元服を記しているという共通点があるからである。

■「うひかうぶり」が「いちはやきみやび」の時

しばらく『源氏物語』に依ってみよう。

『伊勢物語』の「男」が十二歳だとした場合、彼は青年と言うより、少年と言うべき年齢となるが、同じ年齢の光源氏は元服とともに左大臣の姫君（葵上）と結婚する。しかし光源氏は藤壺を想って、葵上には満足していない、という状態である。このようにして桐壺の巻は光源氏十二歳で終わり、次は光源氏十七歳の帚木・夕顔の巻に跳んでしまう。十三歳から十六歳まで、彼はどうしていたのか、紫式部は語らなかったのである。

『伊勢物語』では、「男」は「ふるさと」で、「いとなまめいたる女はらから」を垣間見る。『源氏物語』帚木の巻に、左大臣が光源氏を「忍ぶのみだれや」と疑っているという記述がある。これは明らかに『伊勢物語』第一段を踏まえた記述と考えられるので、この左大臣の推量では、光源氏は元服・結婚以降、『伊勢物語』の「男」のような「いrogのみ」の生活を送っていたということになるが、紫式部

の語義がある。古注では後者に解するものが多い。『和歌知頭集』は「はじめてつかさ給はるをいふなり」として、それは「年十七歳」のこととする。『冷泉家流伊勢物語抄』は「十六歳・元服」としながら「五位無冠にて唯左近大夫といふ」と、「叙爵」に解している。『伊勢物語愚見抄』も「叙爵」である。『伊勢物語肯聞抄』から「元服の事也。：叙爵の説不用之」として「はじめにうぬかうぶりを書て、末に終焉のことを書き。一部の心見えたり。即、此物語全篇の心也」と説いている。宗祇のこの説は多くの人に受け入れられたようで、これが現在まで至る解となる。

私も元服と解するのだが、それではこの「男」の元服は何歳のことであつたのか。『知頭集』等の十六・十七歳は「叙爵」であつた。元服は「十一歳より十五歳ぐらいまでが多」（岩波古語辞典）いと言うように、普通は十代半ばまでにおこなわれていた。

この場合は「十二歳」と私は限定したい。根拠は『源氏物語』桐壺の巻に見える、光源氏の元服が「十二歳」と明示されていることである。『源氏物語』が『伊勢物語』から大きな影響を受けていることは、良く知られているが、「うひかうぶり」も関連がある。次項に記すように、紫式部は『伊勢物語』のこの段を念頭に置いていたのである。内容から見ても、在原業平が想定される「男」も、光源氏

はここで、「さしもあだめき、目馴れたる、うちつけのすきずきしさなどは、このましからぬ御本性にて」と、光源氏が『伊勢物語』の「男」と同一化されたいための予防線を張っている。繰り返すが、式部は『伊勢物語』第一段以降の「男」を「あだめき、目馴れたる、うちつけのすきずきしさ」を持つ者と認識していたと言えよう。『伊勢物語』の側から言えば、それこそが「みやび」の世界の「男」の行為であつた。この第一段の「いちはやきみやび」は、「男」の「みやび」が元服という「たいそう早い」時期から始まっていたことを示す言葉でもあつた、と理解すべきなのである。これが私の考えるもう一つの意味である。

なお、小西甚一『日本文芸史Ⅱ』に、『伊勢物語』の男の特有な性質として、「どの段においても、かれが『すき』『みやび』の生活にだけ関わっており、権勢や栄達といった世界に縁もないことである」（400ページ）と述べていられる。第一段の「みやび」はそのスタートであり、光源氏は、その同じ年齢からまだ直接に権力にかかわっていない時期まで、彼が体験したはずの純粹な「みやび」について書かれることがなかったのである。「みやび」の世界が権力の世界か、それこそが『伊勢物語』の「男」と光源氏とを分ける要因だったと言えそうである。

句法指導の心得

―否定・禁止の形②

塚田 勝郎
つ か だ か つ ろ う
筑波大学附属高等学校教諭

1 否定詞を用いたさまざまな句形

前回は句法プリント#05「否定・禁止の形1」を使って、ステップ1「否定詞の位置を確認する」とステップ2「否

定詞の数々を知る」の指導内容を確認しました。
今回は句法プリント#06「否定・禁止の形2」によって、否定詞を用いたさまざまな句形の指導ポイントについて考えてみます。

否定・禁止の形 2 句法シリーズ#06

ステップ3 否定詞を用いた句形に習熟する

(1) 部分否定の形

部分否定か全部否定かは、否定詞の位置によって決まる。「ハ」や「シモ」があるから部分否定だ、と考えるのは短絡的だ。

不 常 有。	部分否定
常 不 有。	全部否定
不 俱 戴 天。	部分否定
俱 不 戴 天。	全部否定
不 必 備。	部分否定
必 不 備。	全部否定

*「俱に天を戴かず。」と読んでいる辞書もある。

(2) 二重否定の形

否定詞を二度用いた形。多くは強い肯定を表している。

兔不可復得、而身為宋国笑。(韓非子)
黄鶴一去不復還、白雲千載空悠悠。
(崔顥「黃鶴樓」)

来此絶境、不復出焉。(陶潜「桃花源記」)

*「不復」の形は、対応する「復不」の形がほとんど見当たらないために、あえて部分否定・全部否定と区別する必要はない。「それきり」しない、もう二度とは「しない」と訳す。

偶有名酒、無夕不飲。(陶潜「飲酒」序)

*次のものは、形が似ているが二重否定ではない。要注意！
不憤不啓、不悱不発。(論語)

無貴無賤、無長無少、道之所存、師之所存也。(韓愈「師説」)

(3) 禁止の形

否定詞「無・莫・勿・毋」は、命令形で「なカレ」と読み、禁止の意味に用いられる。「スルコトなカレ」の形で読む。「コト」を省いて「スルなカレ」と読んでもよい。

寧為鶏口、無為牛後。(十八史略)

醉臥沙場君莫笑、古來征戰幾人回

(王翰「涼州詞」)

己所不欲、勿施於人。(論語)

母友不如己者。(論語)

2 指導上の留意点

(1) 部分否定の形

プリントでも強調しているように、副詞に「ハ」や「シモ」が添えられているから部分否定だ、と考えるのは誤りです。「不俱戴天」を「俱には天を戴かず」ではなく、「俱に天を戴かず」と訓読している辞典や書籍は、現在でも少なくありません。「俱に」と読んだら間違いだ、とはいえないのです。副詞の送り仮名によって部分否定と全部否定を読み分けるのは、教育上の配慮に過ぎません。

(4) 否定詞を用いた慣用表現

○「不能」と「不得」

食之不能尽其材。(韓愈「雜説」)

*「不能」は、「能力がなくて」できない、の意。

莊不得撃。(史記)

*「不得」は、「(機会に恵まれずに)」できない、の意。

○「不敢」と「敢不」

昆弟妻嫂、側目不敢視。(十八史略)

*「不敢」は、「する勇気がない、思い切ってしやうとはしない、の意。」

百獸之見我、而敢不走乎。(戰国策)

*「敢不」は、「敢へて(せ)ざらんや」と読む反語専用の形で、しぜずにいられようか、きつとする、の意。

部分否定か全部否定かは、語順によって決まります。次のような説明によって、理解を促しましょう。

板書例

部分否定か全部否定かは、語順で決まる

常 不 有。|| いつも (常) ↓ いない (不有) [全部否定]

不 常 有。|| いつもいる (常有) ↑ とは限らない (不) [部分否定]

なお、「不復」の形については、「復不」の形がほとんど見当たらないために、わざわざ部分否定と全部否定の別を考える必要はありません。「一度目にできたかどうか」などという区別は不要であり、「それきり」しない、もう二度とはしない」と訳せば十分です。

(2) 二重否定の形

二重否定の形は比較的理解しやすいものですが、紛らわしい形があるので、次のように説明します。

板書例

○二重否定は、否定詞を含んだ部分をさらに否定する

非 不 惡 寒 也。

≡ 寒さをきらわない(不惡寒)のではない(非)。(二重否定)

○否定詞が連続しているだけでは、二重否定とはいえない

不 憤 不 啓、不 悱 不 發。

≡ 憤しない(不憤) 啓しない(不啓)、

悱しない(不悱) 発しない(不発)。(二重否定ではない)

(3) 禁止の形

否定詞のうち「無」「莫」「勿」「毋」の四字は、命令形で「なかれ」と読むときに禁止の意味を表します。ここで注意すべきは、禁止専用の語があるわけではなく、文脈に即して否定か禁止かに読み分けるという点です。たとえば「己所不欲、勿施於人。」は、「己の欲せざる所、人に施すこと勿し。」と訓読することも可能です。しかし『論語』では、弟子の子貢に終身実行するにふさわしい言葉を問われた孔子が、それは「恕(思いやり)」であるとし、「恕」の具体的な説明としてこの言葉を述べています。目の前の人物に対して、「してはいけない」と論じたりとがめたりする場面では、「する勿かれ」と読む必要が生じるのです。

なお瑣末なことですが、書き下し文で「なかれ」を漢字で書くか仮名書きするか迷う生徒には、『なかれ』は、形容詞『なし』の命令形だよ。(助詞・助動詞に読んでいるわけではないから、漢字で書こう。)と一言アドバイスすることも有効です。

(4) 否定詞を用いた慣用表現

「不能」と「不得」のちがいは、次の例文によって明らかにしましょう。

項 莊 拔 劍 起 舞。項 伯 亦 拔 劍 起 舞。常 以

身 翼 蔽 沛 公。莊 不 得 擊。(史記、項羽本紀)

「鴻門の会」の最も緊迫した場面です。項莊は、樊噲が腕を見込んだ若者ですから、「力がないために沛公を撃つことができなかった」はずはありません。項伯が身を挺して沛公を守ったために、「チャンスに恵まれずに沛公を撃つことができなかった」のです。

「不敢」の解釈を参考書や問題集で見ると、二とおりあることに気づきます。どちらが妥当でしょうか。

▼ する勇氣がない。→ しようとはしない。

▼ けつしてしない。

「不敢」は「敢」(勇氣を出して→する)を否定した形ですから、「けつしてしない」と解釈することはできません。筆者は次のように説明して生徒の理解を得ています。

板書例

○「不敢」と「敢不」

敢 告 白。≡ 勇氣をふるって(思い切って)告白する。

不 敢 告 白。≡ 告白する勇氣がない。思い切って告白しようとはしない。

↓ 告白したりはしない。× けつして告白しない。

無 敢 告 白。≡ 告白しようとしてはいけない。× けつして告白するな。

敢 不 告 白。≡ 告白せずにいられようか。きつと告白する。

* 「敢不」は、反語専用の形。

「告白」は、ありのままに言う、正直に言う、の意ですから、現代語の「愛の告白」も、その延長線上にあると考えてよいでしょう。断られたらどうしようかと悩みつつ、勇氣をふるっての行動が「敢告白」なのです。しかし、告白の勇氣が持てない時、思い切った行動が取れない時には、「不敢告白」となってしまう。先ほどまで思い詰めていた人物が、急に「けつして告白しない」という心情に変わるものでしょうか。「不敢」を「けつしてしない」と解釈することが、不適切であるのは明白です。

「敢不」は、多くの文例によって反語表現であることが明らかにされています。ただし、一般の反語表現と異なり、否定詞を含んでいる点が「敢不」の特徴です。うまく訳せない生徒には、「否定詞を含んだ反語表現は、『必ずする』『きつと→する』という肯定の意味になる。」と丁寧に補足する必要があるでしょう。

次回は、これまで触れなかった句形について、要点を確認します。

この連載は大修館HP内「WEB国語教室」でも読むことができます。次回は「WEB国語教室」に12月頃アップする予定です。

半田淳子 編著

国語教師のための国際バカロレア入門

授業づくりの視点と実践報告

A5判・並製・一九二ページ
定価Ⅱ本体二〇〇円十税

評者Ⅱ荒木 信

最近よく耳にする「アイビー」。「国際バカロレア（IB）」のことだとは知っていても、それがどのようなものかよく知らない、という方は多いかもしれない。

本書はそんなIBを、国語教師の目線で紹介した本邦初の入門書である。執筆陣はIB校で教鞭をとる教師が中心であり、その解説や実践報告はIB教育のリアルな質感を伝えている。

IBの国語教育は、一冊丸ごと作品を読む、翻訳作品の学習が必須、ルーブリック形式の詳細な評価規程が示されるなど、日本

との違いも大きい。ただ、本書の解説や実践からは、日本の教育が目指すものとの同質性も強く感じられる。特に新学習指導要領で強調される「資質・能力の育成」「主体的・対話的で深い学び」といったことは、IB教育において日々目指され、実践されていることだといえる。

日本でのIBの評価は「何だかすごい」から「異質なものの」までさまざま、まだ揺れているが、今後の国語教育を考える上でも、まず本書でIBの内実を覗いてみてはいかがだろうか。

松丸道雄 著

甲骨文の話

四六判・並製・二四〇ページ
定価Ⅱ本体一八〇円十税評者Ⅱ福田哲之
島根大学教育学部教授

甲骨文とは、今からおおよそ三千三百年前の殷代後期にさかのぼる最古の漢字である。十九世紀末（一八九九年）に偶然発見され、今日まで多くの学者の努力によって研究が進められてきた。

著者は、この甲骨学百二十年の後半の六十年を、第一線の研究者として歩んでこられた世界的な学者であり、本書は主として一般読者を対象に執筆された、書き下ろしを含む十一篇の文章・講演録からなる。

本書の魅力は、斯界の第一人者によるわかりやすい解説とい

う点にとどまらない。王や王妣の十干名に込められた殷人の世界観（Ⅲ篇）、貞人と書契者との関係（Ⅳ篇）など、著者独自の見解とともに、字釈の基盤となる文字域についての課題（Ⅶ篇）や甲骨文の十二支と現行十二支とのズレの問題（Ⅷ篇）なども提起されており、甲骨文研究の醍醐味を味わうことができる。

さらに漢字研究の最大の謎ともいえる、甲骨文以前の漢字起源問題に対する大胆な仮説（Ⅹ篇）も、漢字に関心のある読者には必読の一篇といえよう。

時田昌瑞・安藤友子 監修／ことわざ授業づくり研究会 編

学校で使いたいことわざ

授業がもっと楽しくなる！

A5判・並製・一六〇頁
定価Ⅱ本体一六〇円十税

評者Ⅱ大井 悟

ことわざという先人の知恵の結晶を教育に生かそう、というねらいから、世にもユニークなことわざ本が誕生した。

なんと、目次が時間割になっている。一時間目：国語、二時間目：算数……という具合。主要教科はもちろん、図工や音楽、家庭科、道徳、総合、学級会、中休みや給食、部活まである。

算数で、二本の直線は一度交わると二度と交わらないことを「会うは別れの始め」。理科の浸透圧の説明で「青菜に塩」。体育の徒競走では「先んずれば人を

制す」。地理の郷土学習では「住めば都」。なるほど、こんな場面でことわざが使えるな、と納得。

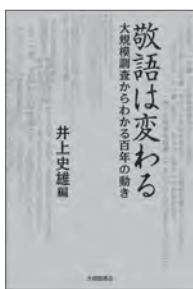
恥ずかしながら知らなかったものも多い。漢字のトメハネなど細部に気をつけましょう、「瓜に爪あり爪に爪なし」。給食が待ちきれない子には「空腹がいちばんのソース」だ、もうひとがんばり。試合に負けた野球部には「負けに不思議の負けなし」とチクリ。言ってみよう！

「玉磨かざれば光なし」。ことわざ力を磨けば子どもたちの尊敬のまなざしが集まる、かも？

井上史雄 編

敬語は変わる

大規模調査からわかる百年の動き

四六判・並製・二九六ページ
定価Ⅱ本体二〇〇円十税

評者Ⅱ山本 敦

本書は、国立国語研究所が一九五三年、一九七二年、二〇〇八年の三回にわたって愛知県岡崎市で実施した敬語の使用実態に関する大規模調査の成果を核にした総合的敬語論である。

グラフ・表・地図がたくさん出てくる。たとえば「荷物預け」という同一の状況で、昔と今の様々な年齢層の人がどんな言葉づかいをしたか。折れ線グラフから読み取れるのは、「年をとると話が長く丁寧になる」ということである。逆に言えば、昔も今も若い人は丁寧な言葉づかい

ができなくて当たり前ということがわかるのだ。

絶対敬語から相対敬語への流れ、職業差の縮小、その場にいる人への敬語の衰退、中央から地方への（あるいは逆の）新しい表現の伝播など、時代とともに言葉が変わっていくことが納得されて感慨深い。敬語の分類の考え方、のしり言葉や若者語、外国語の敬語、街の「敬語景観」まで、敬語研究で扱われる話題の広さにも驚く。

とにかく盛り沢山。言葉の研究の面白さにどっぷり浸れる。

新 国語便覧

トータルサポート

もっと知りたい！

を支える新しい時代の国語百科



2018年度より
新登場！

5大特色

次ページからくわしくご紹介！

- 1 豊富な情報量
- 2 評論を重視
- 3 使いやすさを追求
- 4 表現力・語彙力を強化
- 5 主体的な学習をサポート

A5判・オールカラー・608ページ

定価＝本体880円＋税

大修館書店編集部【編】



指導用準拠 CD-ROM
ご用意しています。

大修館書店

古 評 近 漢 表 言

見たい項目にたどりつきやすいよう、各編にテーマカラーを設けました。

- 古典文学編
- 評論編
- 近現代文学編
- 漢文編
- 表現編
- 言葉の知識編

特色

調べたいことがすぐに見つかる

3 調べたいことがすぐに見つかる 使いやすさを追求

✓ 使いやすい6章構成。
テーマカラーやインデックスで
検索も便利

言 表 漢 近 評 古

各編の扉に、インデックスを集めました。インデックスをたどると、見たいページにスムーズにたどりつけます。

古 評 近 漢 表 言

学習の履歴が残り、使うほどに「マイ便覧」が
できあがる！ 全ページにチェック欄を設置。

1 | 2 | 3 | ✓チェック

特色

論壇の系譜と最前線がわかる

2 論壇の系譜と最前線
評論を重視

- ✓ 大学入試で重視される
評論を強化。
「評論編」を独立させました。
- ✓ 類書中最大の
評論家165人、
キーワード174語を立項。

特集 3
論壇の最前線

戦後から現代までの主
な評論家を分野別に配
下段に現在活躍中の若
手評論家を紹介した。

特色 2

特色 3

言 表 漢 近 評 古

特集「評論への招待」
「論壇の最前線」をはじめ、わかりやすい図解を多用したビジュアルな構成にしました。

言 表 漢 近 評 古

特集「評論への招待」
「論壇の最前線」をはじめ、わかりやすい図解を多用したビジュアルな構成にしました。

236

古 評 近 漢 表 言

「チャレンジ」コーナーでは、実際の入試問題を使い、読み方・解き方のポイントを丁寧に解説。

ブックガイドでは、「知る」「恋する」「旅する」「考える」「挑む」「味わう」「楽しむ」「つながる」の8つのテーマで本を紹介。

- ✓ 各編末尾に、入試問題に挑戦できる「チャレンジ」コーナーを設置しました。
- ✓ ブックガイドも豊富に掲載。

チャレンジ レベル I 読むためのポイントを確認しながら、大学入試問題に取り組んでみよ。 評論編 P.230

■ 次の文章を読み、問いに答えなさい。

1 かたがての日本の川はゆるやかに蛇行していた。水の流れば曲がくねりながらスピードを落とし、ときに河川敷の草原や林に侵入され、私の記憶のなかにある蔵野の小川とどうであつたように、川の流れのゆがみやたがひが、不承等に流れゆく川の時をつくりだしていた。そしてそのゆるぎつつ流れる川こそ、日本の農村の川であつたのである。

2 いま私たちは、昔からの生活が続いている社会に生きている。そこにはまだ時間がつくられていくような感覚をいだかされる。実際の都市の時間と村の時間の時間連達の違いは、社会がゆるぎつつと流れているような感覚をいだかされる。実際の都市の時間と村の時間の時間連達の違いは、社会がゆるぎつつと流れているような感覚をいだかされる。

3 しがが私は、時間速度の差を村の時間の特徴があるとは思っていない。しがが私は、時間速度の差を村の時間の特徴があるとは思っていない。しがが私は、時間速度の差を村の時間の特徴があるとは思っていない。

4 農家の一年とは、同じ速度で歩む時間によつて構成されてはくはない。荒起までの春、夏の草刈り、秋の刈入れ、そんなとき、季節のながさはゆるぎつつ、その合間にあられるような時間、季節のながさはゆるぎつつ、その合間にあられるような時間、季節のながさはゆるぎつつ、その合間にあられるような時間。

5 一日のなかでも同じこと。雑草をすくるときも、村人たちは、無類たような時間をつくりだす。時間とはさすにすぎず、ときと流れていく。時間とはさすにすぎず、ときと流れていく。時間とはさすにすぎず、ときと流れていく。

6 これは時間。都市のようには人間たちを外から管理し、価値を生みだす客観的の暮らしたとも等号で存在しているものではない。

7 (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12) (13) (14) (15) (16) (17) (18) (19) (20) (21) (22) (23) (24) (25) (26) (27) (28) (29) (30) (31) (32) (33) (34) (35) (36) (37) (38) (39) (40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48) (49) (50) (51) (52) (53) (54) (55) (56) (57) (58) (59) (60) (61) (62) (63) (64) (65) (66) (67) (68) (69) (70) (71) (72) (73) (74) (75) (76) (77) (78) (79) (80) (81) (82) (83) (84) (85) (86) (87) (88) (89) (90) (91) (92) (93) (94) (95) (96) (97) (98) (99) (100)

ブックガイド 世界を広げる

「知る」「恋する」「旅する」「考える」「挑む」「味わう」「楽しむ」「つながる」の8つのテーマで本を紹介。

1 「知る」 世界の文化・歴史・科学・芸術などに関する本を紹介。例：『世界の文化・歴史』、『科学の未来』、『芸術の未来』。

2 「恋する」 恋愛小説、青春小説、恋愛漫画などに関する本を紹介。例：『恋愛小説の未来』、『青春小説の未来』、『恋愛漫画の未来』。

3 「旅する」 旅行記、旅行ガイド、旅行漫画などに関する本を紹介。例：『旅行記の未来』、『旅行ガイドの未来』、『旅行漫画の未来』。

4 「考える」 哲学、社会学、政治学などに関する本を紹介。例：『哲学の未来』、『社会学の未来』、『政治学の未来』。

5 「挑む」 スポーツ、競技、ゲームなどに関する本を紹介。例：『スポーツの未来』、『競技の未来』、『ゲームの未来』。

6 「味わう」 食文化、酒文化、音楽などに関する本を紹介。例：『食文化の未来』、『酒文化の未来』、『音楽の未来』。

7 「楽しむ」 娯楽、ゲーム、アニメなどに関する本を紹介。例：『娯楽の未来』、『ゲームの未来』、『アニメの未来』。

8 「つながる」 社会問題、環境問題、国際関係などに関する本を紹介。例：『社会問題の未来』、『環境問題の未来』、『国際関係の未来』。

見やすい大判の便覧もあります

ビジュアルカラー

国語便覧

好評
既刊



特色 5

- B5判・オールカラー・496ページ
- 大修館書店編集部 [編]